

伊 達 市

谷 藤 川 右 岸 遺 跡

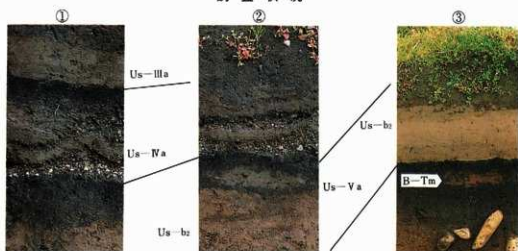
— 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平 成 元 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



調査状況



土層断面

伊 達 市

谷 藤 川 右 岸 遺 跡

— 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平 成 元 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、北海道縦貫自動車道建設にともなう、谷藤川右岸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の作成・執筆は、調査第3課の越田賢一郎（Ⅰ-1・2・5、Ⅱ-3）、立川トマス（写真図版）、田才雅彦（Ⅰ-3・4・6・7、Ⅱ-1-1・2、Ⅱ-2-3）、葛西智義（Ⅱ-1-3、Ⅱ-2-1・2）がおこなった。なお、火山灰（Ⅰ-8）については、調査第1課の花岡正光が執筆した。
3. 土器実測は小林晴美、銅片石器実測は渡啓枝、礫石器実測・遺物集計・計測・図版作成は田中暢子がそれぞれ担当した。

なお、種子の同定については『PROJECT SEEDS』に依頼した。また、谷藤川の疎水について伊達市郷土資料室の松下昌靖氏より玉稿を賜った。
4. 土器実測図・拓本は3分の1、石器実測図は2分の1に統一してある。
5. 調査にあたっては、伊達市教育委員会、伊達市開拓記念館の協力を得た。

また、次の諸機関及び人々の指導・協力を得た。
伊達市役所、谷藤川水系飲料水利用組合、北海道立太陽の園 菅野公一、北海道大学埋蔵文化財調査室 吉崎昌一・椿坂恭代、北海道文化財研究所 吉田玄一、札幌医科大学解剖学第二講座 百々幸雄・大島直行、三戸徳勉、小野嘉正、横山是明、神田正衛

目 次

I. 調査の概要

1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査に至る経緯	1
4. 遺跡の立地と周辺の遺跡	4
1) 立地	4
2) 周辺の遺跡	4
5. 歴史的環境（近世から近代）	8
6. 発掘区の設定	10
7. 層序	10
8. 火山灰	16

II. 遺構と遺物

1. 遺構	21
1) 焼土	21
2) F・C（剥片・碎片）集中	21
3) 焼土のフローテーションについて	22
2. 遺物	23
1) 土器	23
2) 土製品	25
3) 石器等	31
3. 炭窯	39

付編 伊達の開拓と用水路の開削	43
写真図版	51

I 調査の概要

1 調査要項

事業名	北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査
委託者	日本道路公団札幌建設局
受託者	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	谷藤川右岸遺跡（北海道教育委員会登録番号：J-04-76）
所在地	北海道伊達市萩原町 214 ほか
調査面積	1,813 m ²
調査期間	発掘調査 平成元年 8 月 21 日～平成元年 10 月 31 日 整理作業 平成元年 11 月 1 日～平成 2 年 3 月 31 日

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター	理事長	澤 宣彦
専務理事 永田 春男	常務理事	竹田 輝雄
業務部長 伊藤 庄吉	調査部長	中村 福彦
調査第 3 課長 越田賢一郎（発掘担当者）	主任	立川トマス
主任 田才 雅彦（発掘担当者）	文化財保護主事	葛西 智哉

3 調査に至る経緯

伊達市は、北黄金貝塚、若生貝塚を始めとする多くの貝塚群を擁する町として古くから知られており、近年では、有珠 10 遺跡における札幌医科大学の調査によってその名を全国にまで広めている。その反面、市域の過半を占める丘陵地帯の遺跡は、有珠山の厚い火山灰に覆われているため殆ど未調査の状態で、昭和 53 年に伊達市が実施した市内の分布調査においても、僅かに 5 か所が確認されているに過ぎない。幸か不幸か、北海道縦貫自動車道が伊達市の山裾部分を通過することとなり、道教委文化課が昭和 56 年 4 月に実施した分布調査の結果、篠河川遺跡、牛舎川右岸遺跡、そして本遺跡が包蔵地として登録された。本遺跡は、昭和 62 年 10 月に範囲確認調査がなされ、工事計画の変更ができない場合には発掘調査が必要との結論が出された。その後の協議の結果、将来計画は四車線であるが、当面施工する二車線分のみを今回調査し、残りは拡幅の計画が具体化したのちに調査することとなった。

また市道改良部分については、本調査と並行して平成元年 10 月 12 日に文化課による範囲確認調査が行われ、その一部が遺跡範囲に加えられた。追加部分については、文化課と道路公団との協議の結果、土盛工事に変更し現状保存されることとなった。

その後一部工事計画の変更があり、最終的に 1,813 m² について発掘調査を実施した。

I 調査の概要

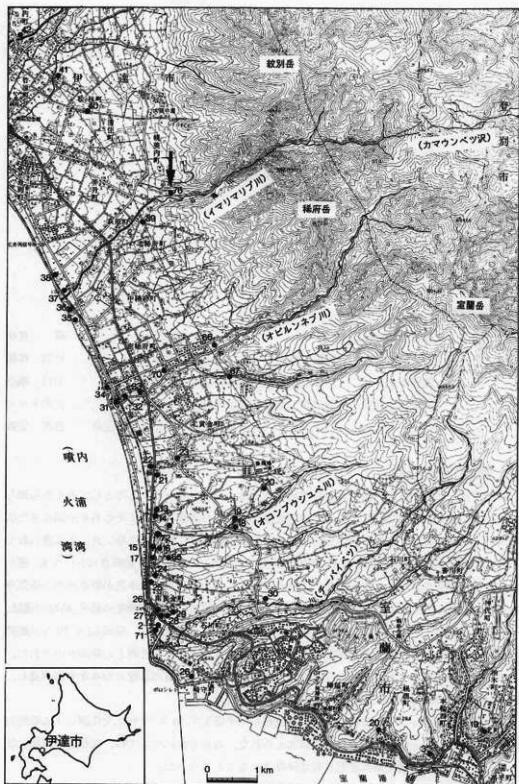


図1 谷藤川右岸遺跡(↓)と周辺の遺跡

(国土地理院発行1:50,000地形図「伊達」を縮尺して使用)

表1 谷藤川右岸遺跡と周辺の遺跡一覧

No.	距離	標高	立地	遺跡名	縄文時代				縄縄文時代			推定 時代	中・ 近世	内 容	発掘調査	文献
					早	前	中	後	縄	山	後	北	大			
42	2.9	40	丘陵	西関内1				○	○					未詳		1
40	2.3	45	丘陵	松ヶ枝1				○						未詳		1
41	2.5	35	丘陵	松ヶ枝2	○	○	○	○						未詳		1
37	0.1	10	砂丘	萩原1										未詳		1
38	0.1	10	砂丘	萩原2	○		○					○		貝塚		1
35	0.1	6	砂丘	北穂府1							☆			未詳		1
36	0.1	10	砂丘	北穂府2				○						未詳		1
39	2.1	65	丘陵	北穂府3			☆							未詳		1
76	2.8	100	丘陵	谷藤川右岸	○		○				○			キャンプサイト	平成元年	本書
31	0.2	6	砂丘	南穂府1				○				○		未詳		1
32	0.4	15	砂丘	南穂府2				○						未詳		1
33	0.7	20	砂丘	南穂府3				○						未詳		1
34	0.1	10	砂丘	南穂府4				○						未詳		1
70	1.3	40	丘陵	南穂府5	○		○	○	○	○				キャンプサイト	昭和57年	2
66	2.5	80	丘陵	牛舎川右岸	○		○	○	○		○		○	キャンプサイト	平成元年	3
67	2.5	100	丘陵	穂府川	○	○	○	○	○		○	○	○	キャンプサイト	平成元年	3
21	0.5	15	砂丘	北黄金8				○						未詳		1
22	0.5	15	砂丘	北黄金9				○						未詳		1
23	1.1	10	丘陵	北黄金10			☆							未詳		1
13	0.6	22	砂丘	北黄金12		○	○							貝塚	昭和33年	1, 4, 5
14	0.4	6	砂丘	北黄金3				○						未詳		1, 4, 5
1	0.5	25	砂丘	北黄金貝塚	○	○	○							貝塚	昭和28年	1, 4-6
72	0.4	4	砂丘	南黄金13				○						未詳		
15	0.3	4	砂丘	北黄金4				○						未詳		1, 4, 5
16	0.4	10	砂丘	北黄金5			○	○						貝塚		1, 4, 5
17	0.3	10	砂丘	南黄金2						○			○	未詳		1, 4, 5
65	0.7	12	砂丘	南黄金11										未詳		1
18	1.9	35	丘陵	南黄金3										未詳		1
19	1.9	45	丘陵	北黄金6										未詳		1
20	2.6	80	丘陵	北黄金7										未詳		1
24	0.3	6	砂丘	南黄金4				○						未詳		1, 4
25	0.2	28	砂丘	南黄金5	○		○							未詳		1
26	0.3	15	砂丘	南黄金6				○						未詳		1
27	0.4	15	砂丘	南黄金7			☆							未詳		1
28	0.6	25	砂丘	南黄金8			☆							未詳		1
29	0.7	20	砂丘	南黄金9						☆				貝塚		1
2	0.3	10	砂丘	南黄金1				○		○				貝塚		1
71	0.2	10	砂丘	南黄金12									○	貝塚		
30	2.4	50	丘陵	南黄金10			○							未詳		1
75	0.3	40	砂丘	崎守						○				未詳	昭和42年	
23	0.3	50	丘陵	槐		○	○							貝塚		7
1	0.3	40	砂丘	本輪西		○	○							貝塚	大正10年	7
14	0.3	50	砂丘	本輪西2		○	○							貝塚		7

凡例：No. は道教育委員会の登録番号に同じ、No. の白マキは室蘭市の遺跡、☆は時代のみが判る遺跡、距離は海岸線から遺跡までの距離で単位はkm、標高の単位はm

4 遺跡の立地と周辺の遺跡

1) 立 地

本遺跡は、伊達市街地の東方約4 km、海岸線から約3 km 入った、標高100 m ほどの地点に位置する(図1)。地形的には、谷藤川が形成した扇状地の扇頂部分、西流する谷藤川が大きく南へ蛇行する地点に立地している(図2)。谷藤川は、主として集塊岩からなる紋別岳と稀府岳の間を深く刻んで流れる川で、中流部では処々に懸崖を形成し、天狗岩と呼ばれる奇岩がみられるあたりは紅葉の名所になっている。また、かつては登別方面へ抜ける道筋としても利用されたことがあったという。

遺跡の主体部は、谷藤川の蛇行地点沿いに緩く張り出した舌状部分にある。遺跡の北側は、紋別岳の南東端にあたる舌状丘陵で、遺跡面との比高は約45 m、斜面の角度は40度近い。今回の調査区は、この丘陵裾部分から谷藤川までの範囲である。調査地点における、包含層上面と谷藤川水面との比高は5 m ほどあり、急崖をなしているが、100 m ほど上流側では傾斜が緩やかで、比高差は2 m に満たない。調査区の中央北寄りに小さな沢跡がある。この沢跡部分は、降雨のたびに水が湧出し、しかも降雨後いつまでも水が流れ続けていた。現在でも、丘陵部の水を集めて伏流水として流れ続けていたようである。詳細は第7節で述べるが、調査区内の土層は、この沢跡を境に丘陵側は崖堆積物が厚く、谷藤川寄りでは扇状地堆積物が主体となっている。

2) 周辺の遺跡

伊達市域は、地表面を有珠山の火山灰に厚く覆われているため、表面踏査では遺跡が確認しにくいところである。このため伊達市では、昭和53年に試掘を含む分布調査を実施するなどして、遺跡の周知化に努めており、現在76カ所の包蔵地が登録されている。このうち、市街中心部を貫流する気門別川の南側には39遺跡が所在する。これに室蘭市西部に所在する4遺跡を加えた43遺跡について考えてみたい(表1、図3～6)。

表1は、遺跡を北側から順に配列したものである。分布調査の疎密の問題も無論あるが、大半の遺跡が海岸線から1 km 以内の地点で確認されており、特に0.5 km 以内に位置するものが目立つ。また、標高をみると50 m 以下の遺跡が殆どである。そうした中で、本遺跡や牛舎川右岸遺跡、稀府川遺跡は海岸線から2.5 km 以上離れており、かつ標高も高い。

遺跡の立地と、営まれた時代、内容についてみると、縄文時代早期の遺跡(図3)は、海岸部の段丘上に3遺跡、丘陵部に5遺跡がある。今のところ貝塚や遺構は確認されていない。縄文時代前・中期の遺跡(図4)は、海岸部の段丘上に10遺跡、丘陵部に6遺跡確認されている。海岸部の遺跡のうち、北黄金貝塚をはじめとする7遺跡で貝塚が確認されている。縄文時代後・晩期の遺跡(図5)は、砂丘上7遺跡、海岸部の段丘上4遺跡、丘陵部6遺跡となっており、この時期以降、砂丘上に立地する遺跡が現われる。統縄文時代以降の遺跡(図6)は、砂丘上5遺跡、海岸部の段丘上3遺跡、丘陵部4遺跡が確認されている。

また、砂丘上や海岸部の段丘上に位置する遺跡が、集落主体で大規模な貝塚などを遺すのに

対し、丘陵部に位置する遺跡は、各期の遺物が出土するものの量的にはわずかで、住居などの遺構が極端に少ない。このことは、海岸部の遺跡が定住的な生活の場（母村）であり、丘陵部の遺跡が季節的な活動の場（キャンプ・サイト）であったことを示唆しているものと思われる。

次に、遺跡の分布を河川の流域別にみている。谷藤（イマリマリブ）川流域には6遺跡が確認されており、その立地をみると海岸部の砂丘上に3遺跡、段丘上に1遺跡、丘陵部に2遺跡となっている。それらの時期と内容を見ると、縄文時代早・中・後期、続縄文時代後北期の遺跡があり、海岸段丘上に位置する萩原2遺跡に貝塚（縄文時代中期）が遺されている。この萩原2遺跡は、出土遺物の時期が本遺跡と全く同じである点、興味深い。

牛舎（オビルンネブ）川流域には7遺跡があり、立地別には海岸砂丘に1遺跡、段丘に3遺跡、丘陵部に3遺跡となっている。時期的には、縄文時代早期から縄文時代までの各期の遺跡があるが、貝塚は確認されていない。

気仙（オコンブウシュベ）川流域には16遺跡が所在する。立地別には海岸砂丘に5遺跡、段丘に7遺跡、丘陵部に4遺跡である。時期をみると、続縄文時代の後北・北大期を除く各期の遺跡があり、三つの遺跡で貝塚が確認されている。このうち、段丘上に位置する北黄金貝塚と北黄金2遺跡は縄文時代前期の貝塚。砂丘上に位置する北黄金5遺跡の貝塚は、縄文時代後期のものである。

チャイベツ（チーバイベツ）川流域には7遺跡がある。立地別には海岸砂丘に2遺跡、段丘に4遺跡、丘陵部に1遺跡である。時期をみると、縄文時代中・後期と続縄文時代恵山期、アイヌ期の遺跡があり、やはり3遺跡で貝塚が確認されている。このうち、砂丘上に位置する南黄金遺跡は縄文時代後期の貝塚、南黄金12遺跡はアイヌ期の貝塚であり、段丘上に位置する南黄金8遺跡は縄文期のものと思われるが詳細は不明である。

参考文献

- 1 峰山巖、大島直行 1979『伊達市の遺跡』
 - 2 千葉英一、大沼忠春、田中雅彦 1983『南樺府5遺跡』
 - 3 (財)北海道埋蔵文化財センター 1990『牛舎川右岸遺跡・樺府川遺跡』
 - 4 名取武光、峰山巖 1963『茶臼場遺跡（付：北黄金遺跡群）』『北方文化研究報告18』
 - 5 渡辺茂編 1972『新稿伊達町史(上)』
 - 6 峰山巖、百々幸雄、大島直行ほか 1986『北黄金貝塚』
 - 7 大場利夫 1962『室蘭遺跡』
- 村山正郎、上村不二雄 1955『5萬分の1地質図幅説明書 西紋篇』
北海道防災会編 1973『有珠山』
森美典 1983『伊達市のアイヌ語地名雑話』『伊達の風土 第二号』



図 2 発掘区の位置と周辺の地形



図3 縄文時代早期の遺跡



図4 縄文時代前・中期の遺跡

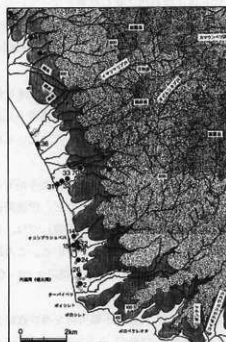


図5 縄文時代後・晩期の遺跡



図6 続縄文時代以降の遺跡

凡例 ○遺跡の位置 ●No 該期の遺跡

地形区分は 0~40 m, 40~100 m, 100~500 m, 500 m 以上、ドット部は砂丘
原図は明治 29 年度版 仮製 5 万「紋蔵」による

5 歴史的環境（近世から近代）

谷藤川は、古記録ではエマレマレップ、イマリマリフなどと記されており、戦後まで今礼（禮）穂府川と表記されていた。

谷藤川の名称は、江戸時代末に有珠付近で牧の管理をしていた谷藤氏が、この川の河口付近に移り住んできたことに由来する。谷藤氏は、有珠に住んでいたころから、牧士頭の仕事のほか、旅人やアイヌの人々の世話などに心を尽くしたので衆望も厚かった。移住後も牧業のかたわら旅館屋と駅通も兼ね営み、伊達亘理藩の入植に際しても大いに尽力した。土地の人々は、だれということなく紋籠谷藤村と呼んだという。

中世から近世初頭における伊達市周辺の様子については、ほとんどわかっていない。

この時期の考古学的資料では、館山チャシ跡、有珠にあるボロチャシ、ボンチャシ、チャシコツの存在が知られている。また、有珠善光寺遺跡から有珠火火山灰（1663年降下）に覆われて貝塚やアイヌの墓が検出され、そこから鉄製品・陶磁器・漆器等が出土している。同時期の遺物は、有珠周辺や虻田の遺跡でも発見されており、アイヌと和人の交易が盛んに行われていたことを示すものであろう。

文献では、寛文九年（1669）の記録である『津軽一統志』巻10に、「うす」と「おさるへつ」（長流）にアイヌの村があったことが記されている。有珠から現在室蘭との境にあたる「ちはいべつ」までは秋おとなナツシャインの持分で、松前藩士浅利猪之助の商場となっていた。

また、『新羅の記録』には慶長18年（1613）に善光寺を修復したことが記されているので、それ以前から和人が入り込んでいたことが明らかである。有珠場所の開設も江戸時代初期までさかのぼることは確実であろう。

有珠場所については、引き続きいくつかの文献にみえるが、谷藤川周辺のことは、18世紀末の寛政年間頃の記録によりよく現われるようである。寛政3年（1791）の『東蝦夷道中記』には、現在の市街地から室蘭市との境あたりまでは、何れも地名ばかりで蝦夷住居もないとの記載がある。その地名の一つに「イマリマレ」の名がみえる。

寛政11年（1799）に東蝦夷地が幕府直轄となり、文化元年（1804）には有珠善光寺が官寺として創建されることが決まるとともに、有珠・虻田に牧場が4カ所置かれるなど、伊達周辺は蝦夷地支配の拠点の一つとなった。文化3年（1806）の『東蝦夷地各場所大観』では、有珠場所にアイヌが78軒328人、和人が6軒21人、牧士が2戸5人いたとされている。この記録には、有珠場所のことがかなり詳細に記述されているにもかかわらず、谷藤川周辺については、「エマレマレップ」の川名が記されているにすぎない。

この周辺のことが少し明らかになるのは、安政元年（1854）に幕府が蝦夷地を再び直轄として後の記録からである。松浦武四郎の『廻漕日記』（安政2年（1855）9月）には、「イマリマリフ」の名前に続けて「此辺昔は土人無しし所なるが、嘉永丑年（1853）三月十五日の山焼より土人共多く引き移りて家居する也。然し此頃少し所元へまた引取りし由也。前に燕・神・栗様成もの多く作り」とある。

また、石川和助の『観国録』（安政4（1857）年）にも、戸口の項に「エマレマレフ川の左右岡上に三十余軒漁場もあり、聞くウス山焼後その地の人民此処に移り避け、近日旧所に戻りし由故に、此中には空家もある可し」と、同様の記載がある。

先述した谷藤氏が移住して来たのも噴火の後といわれており、森一馬ほかによる「罕有日記」（安政4（1856）年）に「イマリマリッ漁家并夷戸多し、又殊場足軽の厩宅有」としているのは、このことを指しているものかと思われる。

これらの記録によれば、谷藤川の河口近くには1853年の有珠山噴火によって逃げてきた人々が住んでおり、その数は多いときには30軒ほどにもなった。その中には、アイヌの人々だけでなく、漁師や牧場足軽もあり、漁場も営まれていた。噴火が収まるとともにその一部は引き上げていったが、そのまま残った人々もいたことがわかる。

この頃から「イマリマレフ」は、川の名を指すだけでなく、地域または村の名として使われるようになっていく。玉虫左太夫の『入北記』では、安政4年（1857）の土人人別家数調をウス村、モンベツ村、エマレマレフ村、オヒルネツフ村、チマエヘツ村に分けて、エマレマレフ村には家数11軒人別54人と記されている。

明治となり北海道開拓使が置かれ、明治4年（1871）の郡区編成に際して、有珠郡は有珠村、長流（おさる）村、紋鑑（もんべつ）村、稀府（まれっぶ）村、黄金郷（おこんしべ）村に分けられ、谷藤川（イマリマレフ川）は、紋鑑と稀府の境界とされた。左岸にあたる稀府村は今般稀府村とも呼ばれており、川の名が地名に変化し、村の名となった一例である。

明治3年から14年まで9回にわたり、仙台藩互理領主伊達邦成以下2,700余名の移住が行われた。谷藤川の右岸は今回発掘を実施した付近まで移住民の屋敷地とされ、上流側が弄月町（丁）、下流側が萩原町（丁）と呼ばれた（図版10・11参照）。

明治5年には、周辺住民の生活用水を確保するため、谷藤川から疎水を引く工事が行われた。取水口は現在水神の碑が建っているところで、掘削は弄月町を中心として、全長700mに及んだ。さらに翌6年には、途中の分枝点から掘削を再開し、清澄町、萩原町への疎水が完成した。これによって、谷藤川の水は、この地域に住む人々に、生活用水としてまた農業用水として利用されることとなった。最初に疎水が開通した旧暦明治5年7月19日（新暦8月19日）を開通記念日とし、現在まで水神様の祭が地元の人々によって行われている。

現在でも、谷藤川から簡易水道が引かれ、多くの人々がそれを利用している。かつての疎水は、ほとんど利用されなくなり函渠となっているところもあるが、その一部は、未だに昔の面影を残し流れ続けている。それも、まもなく河川整備事業によって、コンクリートの配水に置き換えられようとしている。また、谷藤川自体も下流から整備され、昔の姿を留めるのはほんのわずかである。

なお、疎水については、付編で松下昌靖氏が触れておられるので参照していただきたい。また、本項の記載にあたっては、『新稿伊達町史』（昭和47年）および『雪のあけぼの』（昭和44年）を参照させていただいた。

6 発掘区の設定

発掘区は、道路予定センターの STA148 杭と STA147+80 杭を結ぶ線を基準とし、STA148 杭を $X=6$ 、 $Y=2$ とし、 X 軸の正方向を南（谷藤川）側に、 Y 軸の正方向を東（丘陵）側とする座標を設定した（図 7）。グリッドは (XY) で表示する $10\text{m} \times 10\text{m}$ の大グリッドを基本とし、各々の大グリッドを (xy) で表示する 100 個の小グリッド（ $1\text{m} \times 1\text{m}$ ）に分割した。各グリッドの表示は、大グリッドの場合、42 区、 $10 \cdot 1$ 区などとし、小グリッドを指す場合には、51-59 区、 $11 \cdot 2 \cdot 00$ 区などとした。更に、小グリッド内での位置を指す際には、33-01(45, 62) のように、 cm 単位の数値を括弧内に示した。

なお、 X 軸の方位は $N-15^{\circ}20'-E$ である。

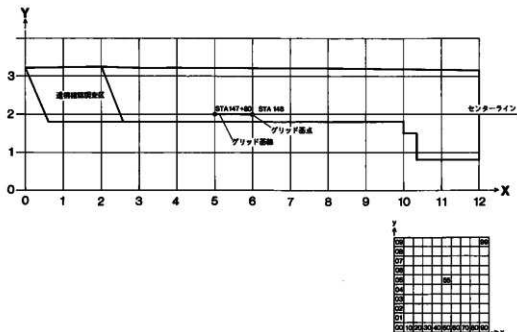


図 7 発掘区の設定と表示（右は大グリッドの分割と小グリッドの表示）

7 層 序

土層図は発掘区の東側壁面とった（図 9～12）。今回の調査区は、第 4 節でも述べたように土層平面的には大きく三区分することができる。一つは谷藤川沿いに舌状に張り出した部分であり、風倒木や立ち枯れた木の根跡が目立つ。一つは沢跡周辺の地点で、粘土質になっている部分が多い。そしてもう一つは丘陵斜面からその裾部分で、この部分では丘陵部表層物質が移動して二次堆積したもの（崖堆積物）が主体を占めている。

基本層序は次のとおりである。なお、火山灰については次節で詳述する。

- 1 層 表土。 $X=0 \sim 1$ ラインの山林部は丘陵部表層物質の二次堆積である VIc 層混じりの黒色腐植土。 $X=2 \sim 11$ ラインは畑の耕作土。

II層 未分解の植物遺体を多く含む黒色土。23区にわずかにみられる。

III層 1822年に降下したUs-IVa火山灰。X=0~2ラインにみられる。色調及び粒度から以下の4枚のフォールユニットからなる。

IIIa層 細粒で灰褐色を呈す。

IIIb層 粗粒(径0.1~1cmを超すものも混じる)で灰色を呈す。

IIIc層 細粒で灰色を呈す。

IIId層 粗粒(径0.1~1cmを超すものも混じる)で灰色を呈す。

IV層 黒色土

V層 1663年に降下したUs-b火山灰。以下の三枚のフォールユニットからなる。

Va層 Us-b₁火山灰。細粒で灰緑褐色を呈す。

Vb層 Us-b₂火山灰。細粒で灰桃色を呈す。

Vc層 Us-b₃火山灰。細粒で灰緑色を呈す。

VI層 黒色~黒褐色土。以下の三枚がある。

VIa層 黒色土。上部は、Us-b火山灰の降下が原因と思われる焼土と炭化材が散在する。縄文時代から縄文時代中期の遺物がみられる。

VIb層 黒褐色~暗褐色土。縄文時代から縄文時代中期の遺物がみられる。

VIc層 暗褐色~赤褐色をなす崖錐層。主として集塊岩の風化礫(径1~10cm)や巨礫を含む丘陵斜面からの二次堆積土。縄文時代中期の遺物がみられる。

VII層 灰褐色~暗黄褐色土。以下の四枚がある。

VIIa層 黄褐色土。谷藤川寄りの部分にみられるシルト質の層。縄文時代早期の包含層。

VIIb層 灰褐色粘質土。

VIIc層 灰黄褐色粘質土。径0.1~1cmの風化礫片を多量に含む。

VIIId層 暗黄褐色砂質土。風化礫の砕けたような粗粒砂。径2~3cmの風化礫を含む。

VIII層 礫を含む黄褐色ローム層。谷藤川寄りでは砂質部分が多く、沢跡付近では粘土質であるが、いずれも堅く締まっている。

この他に、ごく部分的にみられる火山灰として以下の六枚がある。なお、これらを含めて火山灰の分析結果等については次節で詳述する。

a 細粒(下部側は粗粒)で灰色を呈す。

b 細粒(上部側は粗粒)で灰色を呈す。

c 細粒で灰黒色を呈す。

d シルト質で灰褐色を呈す。

e シルト質で白色を呈す。

f シルト質で黄褐色を呈す。



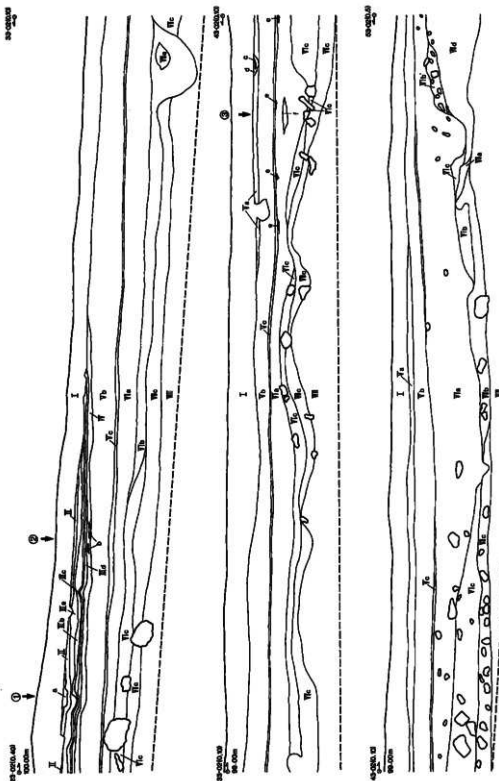


図10 土層断面 (2)

(注) 矢印部分の火山灰については断面で略述する

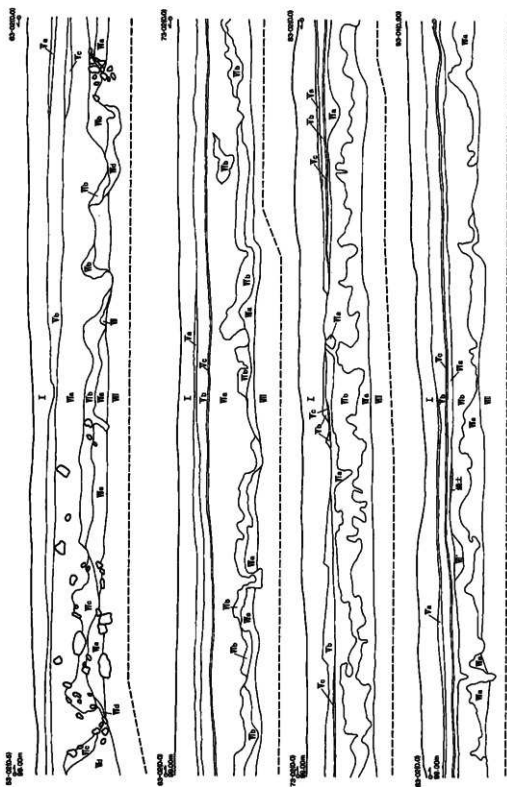


图11 土层断面 (3)

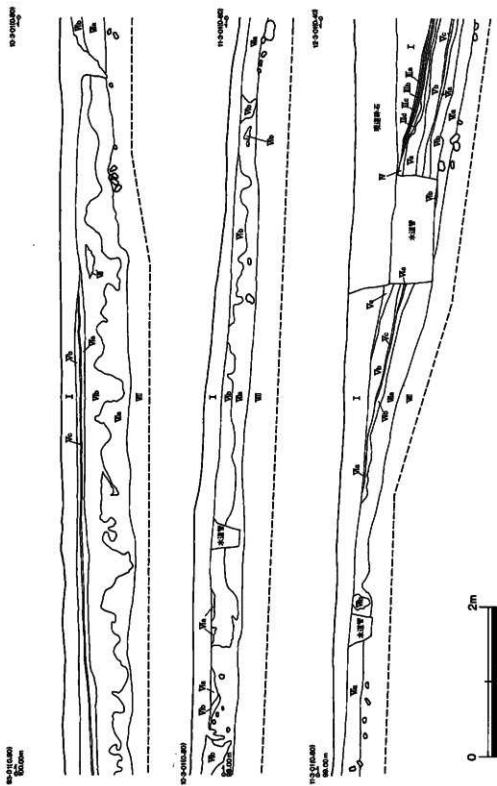


図 12 土層断面 (4)

8 火山灰

前述のように本遺跡では数層の降下火山灰が認められる。以下、火山灰について記載する。

1) 試料と試料の処理方法

発掘区 23-32 区と 33-92 区の火山灰断面（図 10・巻頭写真①・②・③）について観察し、この断面から鉱物組成を調べるための試料を採取した。両区から編集した柱状図と試料採取層準を図 13 に示す。

採取試料は次の手順で処理し検鏡した。水洗→6% H_2O_2 ・10% HCl 処理→水洗→乾燥→篩分け→粒径 1/4—1/8 mm（7 層中の火山灰 1 については 1/8—1/16 mm）についてプレパラート作成（封入剤カナダバルサム）→偏光顕微鏡下で 200 粒以上検鏡→軽石・スコリア等も含めて各鉱物の粒数%を求める。

火山ガラスについては形態分類を行い、各型（仮称）の量比を粒数%で求めた。形態は以下のように分類した。

B 型：漿果状・軽石様。

F 型：気泡・泡壁が繊維状に細長く平行に伸びているもの。

L—C 型：気泡が破碎し、泡壁が ridge をなして曲線状に走るもの。

M 型：気泡と泡壁がつくる模様が網目状をなすもの。L—C 型より気泡は小さい。

N 型：針状の条線模様があるもの。

UT：未分類。上記の型に属さないもの。

7 層中の火山灰 1・2 については、浸液法による火山ガラスの屈折率測定を行った。

2) 結 果

火山灰の鉱物組成を図 14 に示す。各火山灰の特徴は以下の通りである。

2 層 暗灰黄色 (2.5 Y 4/2) 降下火山灰。旧地表の凹地にレンズ状に産出する。最大層厚 8 cm。作土層に切られている。上部 (2—1) はシルト質、下部 (2—2) は中粒—細粒砂質 (軽石質) である。上・下部とも主に斜長石から成る。鉱物組成は互いによく似ている。

4 (III) 層 砂質降下火山灰と、降下岩片・軽石との互層から成る。少なくとも五つのフォールユニットから成り、上位から下位へ a・b・c・d・e と区分した。砂質火山灰は黄灰色 (2.5 Y 4/1) を呈する。

4—a は極細粒砂質火山灰層で、厚さ 0.5 cm > の岩片 (粒径 2—5 mm) 薄層を二・三枚挟む。最大層厚 10 cm。基底部は細粒砂質火山灰である。

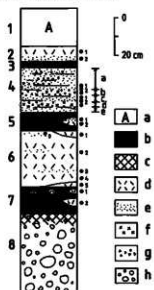


図 13 火山灰層序

a：作土 b：黒色腐植土 c：暗赤褐色腐植土 d：シルト質降下火山灰 e：砂質降下火山灰 f：降下軽石 g：降下スコリア h：扇状地堆積物



I 調査の概要

4-a-1は下部の極細粒砂質火山灰。4-a-2は基底部の細粒砂質火山灰である。

4-bは降下岩片・軽石層で、粒径2-10mmの灰色岩片と発泡の悪い灰白色軽石から成る。岩片量が軽石量を上回る。層厚2.5-4cm。

4-cは砂質降下火山灰層で、層厚2cm。上部1.5cm(4-c-1)は極細粒砂質、下部0.5cm(4-c-2)は細粒砂質である。

4-dは降下軽石・岩片層で、粒径2-15mmの発泡の悪い白色軽石と灰色岩片から成る。軽石量が岩片量を上回る。層厚1.5-3.5cm。

4-eは細粒砂質火山灰で層厚0.4cm。

以上、4層の火山灰は主に斜長石から成る。4-dは火山ガラスが多い。

5(IV)層中の火山灰 5層は黒色(7.5 YR 1.7/1)極細粒砂質腐植土である。この中に、暗灰黄色(2.5 Y 4/2)の降下火山灰がレンズ状に産出する。最大層厚4cm。上部3cm(5層中の火山灰1)は極細粒砂質、下部1cm(5層中の火山灰2)はシルト質である。上・下部とも軽石が多い。但し、この軽石は、扁平なN型ガラス中に斜長石の微斑晶が散在し、通常の軽石のように発泡質ではない。正確には軽石と区別されるべきかもしれないが、便宜的にここでは軽石に含めておく。

6(V)層 にぶい褐色(7.5 YR 5/3)シルト質降下火山灰。層厚24-42(+)cm。砂質火山灰の薄層を不規則に挟む。最上部と基底部は灰緑色を呈する。これはフォールユニットの違いであろう。

6-1は最上部の灰緑色シルト質部、6-0は6層主体の上部の砂質火山灰、6-2は中部のシルト質部、6-3は下部の砂質部、6-4は下部のシルト質部、6-5は基底部の灰緑色シルト質部である。6-1・0・2・3・4は主に斜長石と火山ガラスから成る。6-5は火山ガラスは少なく、重鉱物が多い。

7(VI)層中の火山灰 7層は黒色(N 1.5/0)粘土質腐植土である。この中に二種の火山灰が産出する。上位の火山灰(7層中の火山灰1)は、にぶい褐色(7.5 YR 6/3)シルト質降下火山灰である。6層の基底から0.3cm下方に層厚0.4-1cmで斑状に産出する。主にM型火山ガラスと斜長石から成る。火山ガラスの屈折率は1.500-1.505である。下位の火山灰(7層中の火山灰2)は、褐色(7.5 YR 4/4)シルト質降下火山灰である。6層の基底から6-7cm下方に層厚3.5-5.5cmでレンズ状に産出する。ほとんど全て火山ガラスから成り、アルカリ長石を僅量含む。火山ガラスの屈折率は1.501-1.517である。

3) 火山灰の対比

本遺跡の火山灰を岩相や分布から以下のように対比した。2層は有珠山IIIa火山灰(Us-III a, A.D. 1853)、4層は有珠山IVa火山灰(Us-IVa, A.D. 1822)、5層中の火山灰は有珠山Va火山灰(Us-Va, A.D. 1769)、6層最上部の灰緑色シルト質部は有珠山b₁火山灰(Us-b₁)、6層の主体をなすにぶい褐色シルト質火山灰は有珠山b₂火山灰(Us-b₂)、6層基底の灰緑色シルト質部は有珠山b₃火山灰(Us-b₃)。Us-b₁~b₃: A.D. 1663。以上、火山灰名は横山ほか、1973に

よる。)である。2、4、5及び6層の火山灰は一般に軽石・スコリアを含む。

7層中の火山灰1は、火山ガラスの形態と屈折率から、渡島半島部に現地表に近い層準に産出する灰白色の火山灰(例えば、木古内町札刈遺跡のSt-a、知内町湯の里3遺跡のYn-b、同建川2・新道4遺跡のSm-a、上磯町矢不來2遺跡のYf-a、函館市石川1・桔梗2遺跡の上位の完新世火山灰等。北海道埋蔵文化財センター、1986a・b・1987a・b・1988a・b)に対比される。

7層中の火山灰2は、火山ガラスの形態と屈折率、及びアルカリ長石を含むことから、町田ほか(1981)・町田ほか(1984)の白頭山—苫小牧火山灰(B—Tm)に対比される。

従来、有珠山周辺では、Us-b直下の腐植土層(柱状図の7層に相当)中に斑状に産出する火山灰が駒ヶ岳起源のKo-eとされてきた(横山ほか、1973)。しかし、この層準の火山灰は本遺跡において二種あることが確認された。この二種の火山灰は、佐々木ほか(1970)やArai *et al.* (1986)に示されたKo-eの鉱物組成・火山ガラスの屈折率とは異なる。したがって、Us-b下位のKo-eとされている火山灰は他の火山灰である。

なお、基盤である扇状地堆積物の地積面に近い層準に、橙色のシルト質火山灰が認められることがある。本遺跡では風倒木等により攪乱され、本来の堆積状態を保っていないので、ここでは取り扱っていない。

引用・参考文献

- Arai, F., Machida, H., Okumura, K., Miyauchi, T., Soda, T. and Yamagata, K. (1986): Catalog for late Quaternary marker-tephras in Japan II—Tephros occurring in north-east Honshu and Hokkaido—, *Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ.* 21, pp. 223-250.
- 北海道火山灰命名委員会 (1982): 北海道の火山灰, 23 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1986a): 木古内町札刈遺跡, 128 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1986b): 知内町湯の里3遺跡, 54 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1987a): 木古内町建川2・新道4遺跡, 614 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1987b): 上磯町矢不來2遺跡, 91 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1988a): 函館市石川1遺跡, 320 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1988b): 函館市桔梗2遺跡, 252 pp.
- 春日井 昭(1983): 土層断面に見られる火山灰層の特性。北海道文化財保護協会編「南樺府5遺跡」, 74 pp.: pp. 59-60.
- 町田 祥・新井房夫・森脇 広(1981): 日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, pp. 562-569.
- 町田 祥・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984): テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカatalog—, 古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」, 984pp., 同朋舎: pp. 865-928.
- 佐々木竜男・片山雅弘・菅野道三・天野洋司 (1970): 渡島半島の火山灰について。北海道農業試験場土性調査報告, 20, pp. 255-281.
- 横山 泉・勝井義雄・大橋与志男・江原幸雄 (1973): 有珠山—火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策—, 254 pp., 北海道防災会議.

I 調査の概要

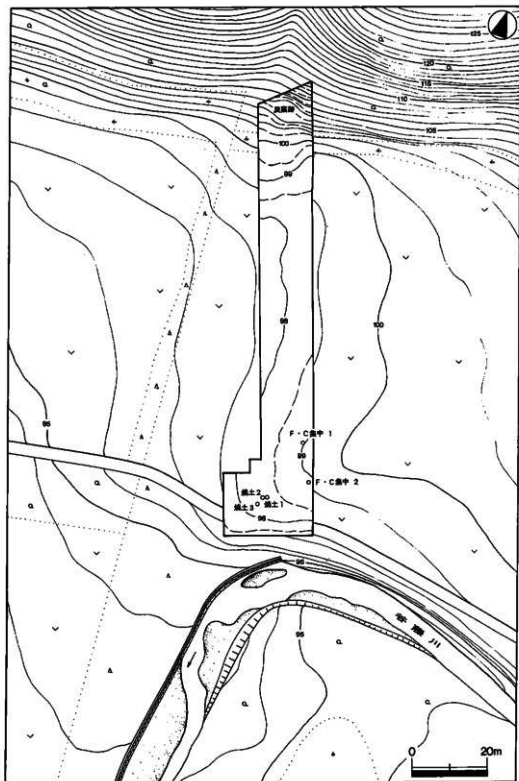


図 15 発掘区周辺の地形と遺構の位置

(発掘区内のコンターはVI層上面)

II 遺構と遺物

1 遺 構

1) 焼土 (図8、15)

焼土は図8に示したように11カ所で確認されている。このうち、10・1-98区、10・1-99区、11・1-16区のVI層上半で確認した3カ所の焼土(図16)は、最も厚い部分でも10cmに満たないものであるが、火山灰等の混入もなく、凸レンズ状に良く焼けている。更に、検出レベル、周辺の出土遺物から、縄文時代後北C₂期の所産と判断した。肉眼では、焼土中に動物の骨や種子等は確認できなかったので、3カ所ともにフローテーションを実施し微細遺物の検出に努めたが、良好な資料は得られなかった。

なお、X=8・9ラインを中心にVI層上面に散在しているその他の焼土及び炭化材は、炭化物や火山灰を巻き込んでいるものや、風倒木痕の中に溜っているものが目立つ。これらは、層序の項でも述べたようにUs-b火山灰の降下によって焼け落ちた樹木の痕跡と考えられるもので、人為的な遺構とはみなしていない。

2) F・C(銅片・砕片)集中(図8、15)

9・2-59区、10・3-50区のVI層上半で、それぞれ銅片・砕片の集中がみられた。これらも、その検出レベルなどから焼土同様、縄文時代後北C₂期のものと思われる。F・C集中1は、総数241点(総重量4.8g)からなる集中であるが、目的銅片のなものはみられず、全て1cm未満の黒曜石小片である。F・C集中2は、総数695点(総重量8.0g)を数えるが、やはり全て1cm未満の小片で、石質は、黒曜石690点、頁岩5点である。出土状況をみると、両者共に東側(レベルの高い側)に最も分布の濃い部分があり、斜面の下方(西側)に向かって次第にまばらに分布している。本来は、東側により集中していたものが流れて広がったもののようである。こうした在り方は、石器製作の二次加工段階で生じた銅片・砕片類が一括廃棄された様相を示しているものと思われる。

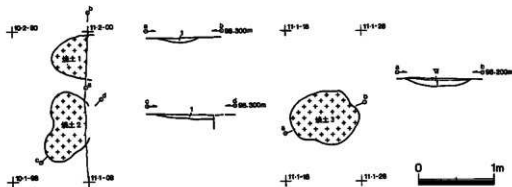


図16 焼土平面及び断面

3) 焼土のフローテーション

選別処理の方法

土壌サンプルは採集時の重量(湿状態)とおおよその容量を記録し、乾燥させた。十分に乾いたところで、再び重量を計り、浮遊選別(フローテーション)を行った。土壌サンプルを入れたポリタライに水を張り、2~3秒攪拌したのち、上澄みを2mmと0.42mmとのふるいに通した。ふるいに残った検出物は乾燥させ、重量と内容を記録した。たらいに沈んだ残土は、1.4mmのふるいを使用して、水洗選別処理を行った。

検出物の鑑定

浮遊選別による検出物の中には、多くの黒い小さな粒がみられた。種子と考え、PROJECT SEEDSに鑑定をお願いしたところ「胞子」との答えを戴いた。

サンプル記録と検出物

3つのサンプルともに指ざわりの均一な土で、小石や炭化物は肉眼では観察できなかった。表2はサンプル量と0.42mmのふるいに残った検出物の一覧表である。2mmメッシュの検出物は、焼土1と2とで微量な炭化物(0.1g以下)のみられたほかは草根と土粒であり、表には含めなかった。同様に、残土水洗検出物は、焼土3に微量な炭化物のあったほかは小石と土粒しか得られていないので表から除いている。サンプルの容量は、28×20cmのポリ袋に焼土1・2が6分目、焼土3がほぼ一杯の量である。

ま と め

今回行った浮遊選別の結果、胞子と微量の炭化物が得られた。種子は検出されなかった。浮遊選別法による胞子の出土例には、平取町イルニカシ遺跡(註1)がある(山田1989)。他に札幌市K441遺跡・北34条地点(註2)では「同定が不能の円形のものを」「胞子の一種であるかもしれない」と記載している(吉崎1989)。また、深川市納内3遺跡(註3)で、細粒球状種子と報告したのも、肉眼的にはあるが、同じものと思われる。胞子は花粉分析では一般的に検出されており(註4)、今回のものも遺跡周辺の自然環境を示しているものと考えられる。

註

(1) 鶴丸俊明・豊原照可也 1989『イルニカシ遺跡』

(2) 上野秀一 1989『K441遺跡 北34条地点』

(3) (財)北海道埋蔵文化財センター 1989『深川市納内3遺跡』

(4) 山田哲郎氏によれば、浮遊選別法で得られる胞子は花粉分析のそれに対しては、炭化した胞子画とするのがより正確な表現との事である。

表2 フローテーション検出物一覧表

サンプル	発掘区	土層	重量(g)		浮遊選別検出物			
			乾燥	湿潤	重量(g)	胞子(個・g)	炭化物(g)	その他
焼土 1	10・1-98	VI	615	810	0.8	305・0.1	<0.1	草根、土粒
焼土 2	10・1-99	VI	565	790	0.8	136・<0.1	<0.1	草根、土粒
焼土 3	11・1-16	VI	1005	1360	4.0	884・0.1	<0.1	草根、土粒

2 遺物

1) 土器

1987年の事前発掘調査、および今回の発掘調査で得られた土器は1,683点である。時期別の内訳は縄文時代早期(552点)、同中期(394点)、同後期(1点)、統縄文時代(736点)である。以下、時期ごとに記述していくが、出土状況や土器の特徴から、縄文時代早期のものは、コッタロ式に相当するもの(154点)と中茶路式に相当するもの(398点)とに分けた(『美沢川流域の遺跡群II』(道教委 1978)のI群b-2類とI群b-3類との分類に準じている。ただし、以後の本文中では単にコッタロ式、中茶路式とのみ記載している)。

これらの分布を図17に示した。縄文時代早期のものは発掘区南半から出土し、6~9ラインにコッタロ式が、7~12ラインまでに中茶路式が多くみられる。縄文時代中期のそれは発掘区北半に拡散した状態のものと、南端に集中するものとがみられるが、それぞれの土器の特徴に大きな時期差は見出せない。縄文時代後期のものは、周辺の中期の土器と区別できない出土状態である。統縄文時代のものは発掘区南側の中央部に集中している。

出土層は、9ライン以南では、図に示したとおり中茶路式、中期、統縄文の順に、下位のⅧ層から出土するものが多い。現場での観察でも、中茶路式は黄色味の強い土から、中期のものは茶色味のある土から、統縄文期のものは黒味の強い土から出土する傾向が認められた。9ライン以北では、Ⅵ層中位から下になると暗い色調で小砂利を多く含むなど、南側とは土層堆積状態が異なってくる。土器の分布も9ライン付近を境にして、様相が異なり、大水などによって遺物が土ごと動いてしまう現象があったように思われる。

整理段階では、出土点数の少ないことから個体識別を行い、それぞれの分布図(I~V)を作成した。個体はアルファベットで示し、分布図と掲載土器とのそれは対応する。分布図中の大きなアルファベットは土器片が2点以上出土したところで、その点数は別表で示した。ただし、統縄文期のものは個体数が少なく、個体分布図(V)には出土点数を記入している。

縄文時代早期の土器(図18-A~T)

コッタロ式(A~M)

15個体の土器が得られ、うち13個体を掲載した。残りの2個体は縄文のみの施された小片である。復元しえたものはなく、全容の不明瞭なものが多い。

A~C1は口縁部で、口唇断面は角型、あるいは山型である。口唇には刺突や刻み加えられている。D~Gは縄端圧痕文を持つものである。DやEのように無文地の面に施されるものとFのように縄文の上から施されるものがある。CやEにみられる貼付帯上の刻みも縄によるものである。Eには貼付(1・2)、絡条体圧痕(1・3)、細沈線(2)、縄文(3)も複合施文されている。Hは絡条体圧痕文のあるもので、軸は角棒と思われる。Jには刻みのない貼付帯がある。太さもCのそれに比べると細く、中茶路式に近い印象を受ける。胎土や器厚は周辺から出土しているコッタロ式に類似している。I・K~Mは縄文のみの認められるもので、I・Kは羽状を呈している。L・Kは底部である。

中茶路式 (N~T)

7個体の土器が得られている。コッタロ式に比べると薄手で、口唇断面は細く尖っている。底部には張出しはみられない。

N~Qは微隆起線の認められるもので、隆起間に縄文(N)や結条体圧痕文(G・P)の施されたものと無文(Q)のものがある。Nでは、主に微隆起線の上に、指で押さえた跡と思われるへこみが残っている。Rは結条体圧痕文と思われる文様の施された土器で、左縁の縦方向に低い高まりがみられる。微隆起線であるかもしれない。S~Tは縄文のみの認められるものである。Sには軽い屈曲がある。

縄文時代中期の土器 (図19・20-A~H)

10個体の土器が得られ、うち8個体を図示した。竹管状工具による刺突や沈線、貼付上の押さえを特徴とするもので、道央部の萩ケ岡3式、あるいは天神山式に相当するものである。AやBのような円形の刺突文を持つものは萩ケ岡4式、あるいは柏木川式に通ずるものと思われるが、Aの刺突は無文地面に施されており、古手の様相、または地域的な特色を示すものであろう。残りの2個体は縄文のみのものと文様の摩滅したものとなる。

AとBは、発掘区北側から出土したものである。Aは出土状態と破片の曲率から口縁と胴下半部の破片位置を推定して図化した。沈線は半截竹管状工具によるもので、2本が1単位となっている。施文順は、①：横位の最上段沈線→②：器面を4分割する縦の沈線→③：横位の2段目、3段目の沈線→④：②の沈線間の2組の縦の沈線のようなものである。ただし、得られた部分が限られていることや不規則な沈線のあること(横位の沈線のうち、最下段のものが部分的に3列になっている)など、不確かなところもある。Bの口縁肥厚部には半截竹管状工具による下からの刺突文がある。A、Bともに縄文の不明瞭な状態であるが、単節のものと思われる。

C~Hは南側で出土したものである。CとDは胎土、文様ともによく似た土器である。貼付上の刺突がCでは中央に、Dでは縁のところにある。Fの口唇と棒状貼付の縁には縄の押圧がある。貼付頂部にも圧痕があるが、施文具は確認できない。Gには、粘土紐で飾られた貼付がある。紐の縁には沈線が加えられている。縄文はC・D・Fが単節、E・G・Hが複節である。縄文時代後期の土器 (図20-I)

図示した1点のみが得られている。無文の底部で、底面からの立ち上がり比較的明瞭な角がついている。このような底部は先述した縄文時代中期の土器にみられないようであり、分離した。ただし出土地点からは、中期に属する可能性がある。

統縄文時代の土器 (図21-A・B)

2個体の土器が得られている。Aは後北C₂式に相当するもので、胴下半部の3分の1と上半部の5分の1ほどに当たる破片が出土した。上半部と下半部とは接合していないが、文様から破片の位置を推定し、復元した。4つの山をもつ、おおぶりな波状口縁を呈する土器と思われる。施文は①：縄文→②：微隆起線文→③：三角列点文の順に行なわれている。補修孔が口縁部破片から底部付近の破片にまで認められる。Bは相当する形式を見出だしかねるもので、僅

か3点の出土である。縄文のみの施された薄手の土器である。丘底の浅い不明瞭な縄文であるが、節が細く縦走気味である。

2) 土製品 (図18-U・V)

中茶路式土器の破片に孔が穿たれている。Uは円盤形を呈するものと思われるが、Vは孔の位置が偏っているようで、円形を呈さない。未製品かも知れない。

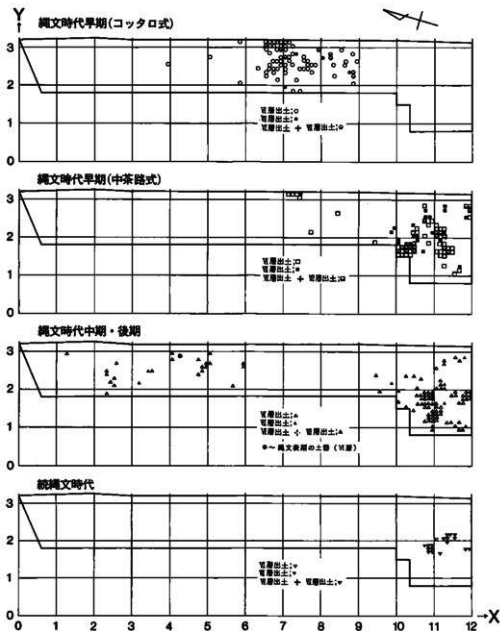


図17 土器の分布

縄文時代早期の土器（コッタロ式）の出土状況についてのメモ

7・3区付近のまとまりと個体Cの在り方をみると、南西にむかって破片が拡散している状態のようである。すでに記したように、土とともに土器片が動いていると考えられる。中茶路式との上下関係も、こうした点や分布の異なる点から不確定である。単純に両土器の出土層の色調とV層からの深さを比べると、コッタロ式のほうが上位とみられるが、中茶路式の分布域に近いところで得られた個体CやJの出土状態には、中茶路式との差は認められない。

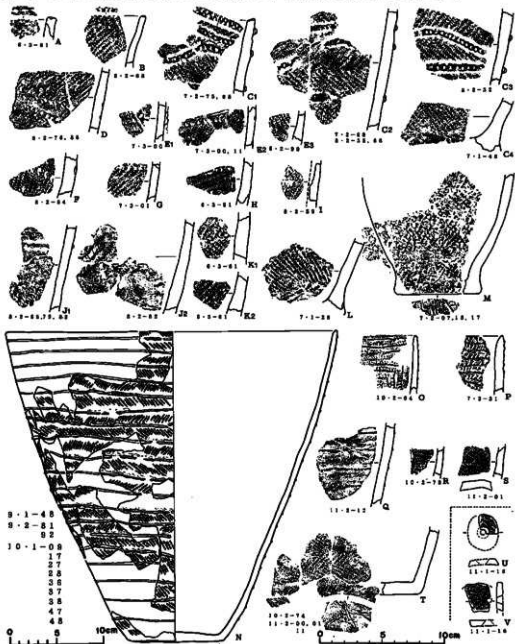
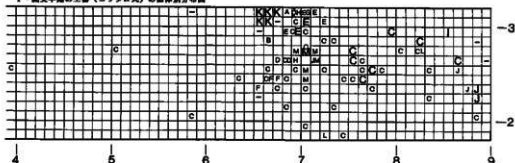


図 18 縄文時代早期の土器・土製品

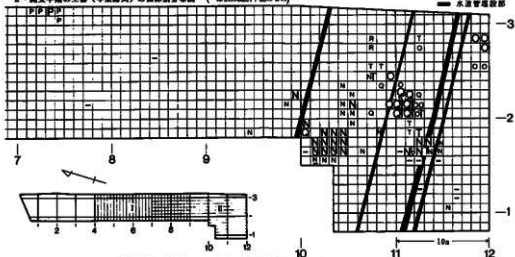
縄文時代早期の土器（中茶路式）の出土状況についてのメモ

個体Nでは、器体4分の1ほどの破片がみられるままとり(10・1区)と、胴部破片のみがみられるままとり(11・1区)とがある。後者のままとりでは、たがいに接合するものがほとんどなく、この場で小片化したものではないようである。また、両区のままとりの間には空白部がみられる。類似した在り方を示すものに中期の個体Cと統縄文の個体Aがある。個体Pは、コッタロ式と同じ出土状態であった。他の中茶路式に比べ磨耗が顕著である。

I・国文学館の土器（コッタロ式）の個体別分布図



II・漢文標題の土語（中葉格式）の個体別分布圖（一は個体識別不能のもの）



縄文早期の土器（コッタロ式）の出土区一覽表（2点以上出土したところ）

DATE	TIME	TO	FROM	DATE	TIME	TO	FROM	DATE	TIME	TO	FROM	DATE	TIME	TO	FROM
C	5	Y	2-5-68	C	5	5-5-68	J	4	5-5-68	K	25	5-5-68			
A	5	Y	2-5-68	A	5	5-5-68	A	5	5-5-68			5	5-5-68		
A	5	Y	2-5-68	A	5	5-5-68	H	5	5-5-68			M	5	Y	2-5-68
A	5	Y	2-5-68	A	5	Y	2-5-68	A	5	5-5-68					
A	5	Y	2-5-68	A	5	5-5-68	A	5	5-5-68						

縄文早期の土器（中基器式）の出土区一覽表（3点以上出土したところ）

[illegible]

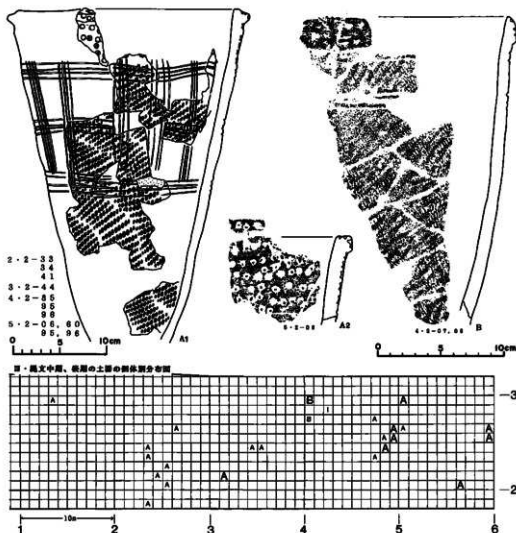


図19 縄文時代中期の土器

中期の土器の出土状況についてのメモ

個体Aは図の正面あたりの破片が4～5区にかけて出土し、右側の断面に近いところの破片が2～3区で得られている。6・2区で出土しているコッタロ式と出土層位の差はみられない。南側で得られた破片の大半は個体CとDに属するものであるが、ともに小片化したものが多い。また、底部あるいは底部近くと思われる破片がみられない。なお、土器内面の剝落片で個体識別の際に判断不能としたものも相当数あるが、分布からみて個体Cに属する可能性が高い。個体Cは、10・1区と11・1区とにまとまりがみられる。両者の間に空間がみられる点や南側にあるまとまりが小規模である点は、先述したように中茶路式の個体Nと後北₂式の個体Aにも認められた。時期を越えて共通するこうした在り方については、人為的とするよりも、何らかの自然現象、例えば水流の影響などを考えたほうが妥当のようである。

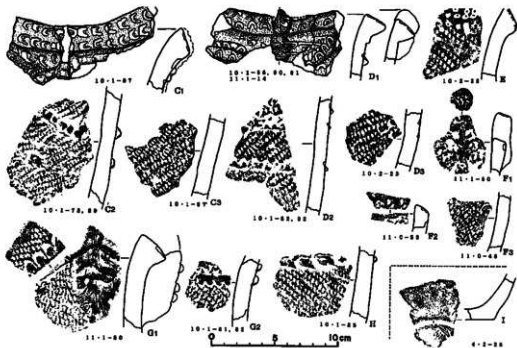
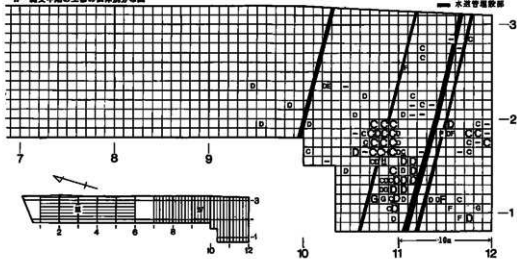


図 20 縄文時代中期・後期の土器

IV・縄文中期の土器の製法別分布図



縄文中期の土器の出土区一覧表（2点以上出土したところ）

一は無体識別不能のもの

年	月	日	时	分	秒	年	月	日	时	分	秒	年	月	日	时	分	秒	
甲	子	2	2-11	0	5	10-1-26	甲	子	10-1-26	甲	子	10-1-26	甲	子	10-1-26	甲	子	10-1-26
乙	丑	3	3-2-4	0	5	10-1-27	乙	丑	10-1-27	乙	丑	10-1-27	乙	丑	10-1-27	乙	丑	10-1-27
丙	寅	4	4-3-9	0	5	10-1-28	丙	寅	10-1-28	丙	寅	10-1-28	丙	寅	10-1-28	丙	寅	10-1-28
丁	卯	5	4-3-9	0	5	10-1-28	丁	卯	10-1-28	丁	卯	10-1-28	丁	卯	10-1-28	丁	卯	10-1-28
戊	辰	6	5-2-0	0	5	10-1-29	戊	辰	10-1-29	戊	辰	10-1-29	戊	辰	10-1-29	戊	辰	10-1-29
己	巳	7	6-2-0	0	5	10-1-30	己	巳	10-1-30	己	巳	10-1-30	己	巳	10-1-30	己	巳	10-1-30
庚	午	8	7-2-0	0	5	10-1-31	庚	午	10-1-31	庚	午	10-1-31	庚	午	10-1-31	庚	午	10-1-31
辛	未	9	8-2-0	0	5	10-1-32	辛	未	10-1-32	辛	未	10-1-32	辛	未	10-1-32	辛	未	10-1-32
壬	申	10	9-2-0	0	5	10-1-33	壬	申	10-1-33	壬	申	10-1-33	壬	申	10-1-33	壬	申	10-1-33
癸	酉	11	10-1-7	0	5	10-1-34	癸	酉	10-1-34	癸	酉	10-1-34	癸	酉	10-1-34	癸	酉	10-1-34
甲	戌	12	10-1-7	0	5	10-1-35	甲	戌	10-1-35	甲	戌	10-1-35	甲	戌	10-1-35	甲	戌	10-1-35
乙	亥	1	10-1-7	0	5	10-1-36	乙	亥	10-1-36	乙	亥	10-1-36	乙	亥	10-1-36	乙	亥	10-1-36
丙	子	2	10-1-7	0	5	10-1-37	丙	子	10-1-37	丙	子	10-1-37	丙	子	10-1-37	丙	子	10-1-37
丁	丑	3	10-1-7	0	5	10-1-38	丁	丑	10-1-38	丁	丑	10-1-38	丁	丑	10-1-38	丁	丑	10-1-38

統縄文時代の土器の出土状況についてのメモ

個体Aは10・1区と11・2区の2カ所にまとまりがある。前者からは口縁部と胴下半部の、ほぼ器体を復元できる破片量が得られた。口縁部と胴下半部とが接合していないが、水道管埋設の際に接点部分の破片が取り去られてしまったと思われる。11区のまとまりでは、文様の施された器体上半部の破片だけが出土している(図A3～5)が、中茶路式の個体Nと中期の個体C同様に、ほとんど接合しない。

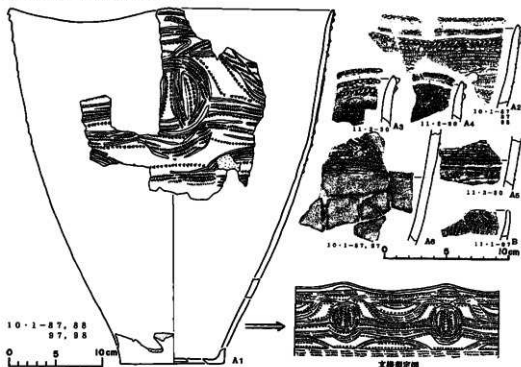
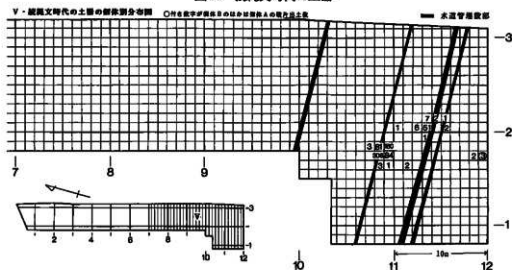


図21 統縄文時代の土器



3) 石器等

今回の調査で出土した石器等は、I層（攪乱層を含む）10点、VI層1,294点、VII層9点総計1,313点（表3）で、このうち石器は、I層（炭窯内）1点、VI層45点、VII層4点と僅かに50点である。単純に石器の分布状態（図22）をみると、器種毎或いは地点的な偏りはみられず、調査区全域からまばらに出土しているような印象を受ける。

石器の出土地点と土器の分布とを重ね合わせてみると、縄文時代早期のコッタロ式とオーバーラップするものには、石鏃（図23-9、10、12）、削・掻器（22-24）、U・F（27）、すり石（35、36）があり、中茶路式には、石鏃（14、18）、削・掻器（25）、R・F（28、29）、すり石（38、39）、たたき石（40）、台石（45、46）がある。縄文時代中期には、石鏃（1-8、11、13、16）、石槍（19、20）、削・掻器（21）、R・F（26）、石斧（32-34）、すり石（37）、砥石（41、42）と石皿（43、44）があり、統縄文時代の後北C₂式には、石鏃（15、17）、石核（30、31）がある。ただし石器の場合、殊に石鏃などは、出土地点が人の生活域と懸け離れていることが往々にしてあり、土器の分布域と一致するもの即ちその時期の遺物とは言いきれない。以下、器種別に特徴を述べる。

石鏃は18点が出土している。形態的には無柄凹基が7点と最も多く、次いで有柄凸基・同平基・柳葉形が各3点、無柄平基・不明各1点である。石材は黒曜石が11点、珪質頁岩4点、頁岩3点となっている。2は、出土地点からすると縄文時代中期であるが、形態的には早期のものと思われる。4は二等辺三角形を呈するもの、5、9はいずれも頁岩製で肉厚の有柄平基で、4は縄文時代前期の、5、9は縄文時代晩期のものの可能性がある。7は赤褐色を呈す珪質頁岩製で、縄文時代後期に特徴的な形態を示している。なお、今のところ縄文時代後期の遺跡で最も近くに確認されているのは、谷藤川河口左岸の北稀府2遺跡であり、縄文時代前・晩期の遺跡は、稀府川遺跡と牛舎川右岸遺跡である。

石槍はVI層から2点（19・20）が出土している。いずれも黒曜石製で逆刺をもつ。縄文時代中期のものと思われる。

削・掻器は5点ある。メノウ製の25がVII層出土で、中茶路式期のもの。他はVI層出土で、21は縄文時代中期、22-24は早期のコッタロ式期のものと思われる。

図24-26は炭窯内に張られた土の中から出土したR・Fである。炭窯を構築する際に周辺の土を掘り上げており、その中に含まれていたものであろう。28はVII層出土のメノウ製R・Fで、25同様中茶路式期のものである。

石核は2点（30、31）が得られている。いずれも流紋岩の張じりがない黒曜石で、30は焼けている。出土レベルから後北C₂式期のものと思われるが、F・C集中にみられる剥片類は流紋岩部分の多いもので、これらの石核とは異なるものである。

石斧は図示した3点（32-34）の他に破片が1点出土している。全て縄文時代中期のものと思われる。32、33は泥岩製で全面が丁寧に研がれている。いずれも刃部に向けて細くなっており、過半を欠いている。両頭もしくは本来の基部側に刃部を再生したものとの可能性がある。34

は片岩製で、敲打剝離の後に刃部付近を研いている。35～39 はすり石である。37 は一面を使用面とするもので、縄文時代中期のものと思われる。他は側縁部を使用している。なお形態は、断面が三角形に近く縄文時代早期に特徴的な形態を示しており、35、36 はコッタロ式土器、38、39 は中茶路式土器の分布範囲から出土している。

40 は一端に敲打痕のみられるたたき石である。

41 は一面を使用している砂岩の砥石、42 は一面に半円形のすり跡のみられる砥岩で、材質は砂岩かと思われるが軟質の部分が目立ち、乾燥するとボロボロと崩れてしまう。

43、44 は石皿で、縄文時代中期のものと思われる。43 は使用面が大きく決れている。

45、46 は台石で、中茶路式期のものと思われる。

以上を整理すると、今回の調査区内では現谷藤川右岸の小舌状部において、縄文時代早期のコッタロ・中茶路式期、中期、続縄文時代後北 C₂ 式期の人間集団が生活を営んでいることが判る。しかし、遺物の出土量や石器の器種の少なさ、住居などの遺構がみられないことからしていずれもごく短期間のキャンプ地的なもののようで、僅かに縄文時代中期の人々が、発掘区北寄りの小沢周辺を作業空間として利用しているに過ぎない。また、縄文時代前・後・晩期の可能性のある石礫が出土していることから、概期の人々の狩猟空間として利用されていたことが考えられる。



図 22 石器等分布

(上は石器出土位置、下は石器等グリッド別出土点数)

表3 谷藤川遺跡出土石器一覧

図番	器 種	調査区	層位	石 材	長 さ	幅	厚 さ	重 量	形 態	備 考	No.
1	石 鏃	2-2-03	Ⅴ	黒曜石	26.0	15.3	3.3	1.0	有柄凸蓋	先端欠損	3
2	石 鏃	2-2-48	Ⅴ	黒曜石	44.4	15.3	4.3	2.4	柳葉形		5
3	石 鏃	3-2-95	Ⅴ	黒曜石	22.5	16.0	2.4	0.5	無柄凹蓋		28
4	石 鏃	4-2-21	Ⅴ	黒曜石	22.0	18.7	4.0	1.0	無柄平蓋	欠けている	19
5	石 鏃	4-2-23	Ⅴ	珪質頁岩	22.0	10.5	4.0	0.9	有柄平蓋	先端わずかに欠損	18
6	石 鏃	4-2-24	Ⅴ	黒曜石	20.2	14.6	2.4	0.6	無柄凹蓋		17
7	石 鏃	5-1-09	Ⅴ	珪質頁岩	19.5	14.3	4.1	0.6	有柄平蓋	一端欠損	34
8	石 鏃	5-2-44	Ⅴ	頁 岩	24.8	18.0	3.5	1.0	無柄凹蓋	先端わずかに欠損	6
9	石 鏃	6-2-95	Ⅴ	頁 岩	30.8	10.2	5.1	1.1	有柄平蓋		8
10	石 鏃	6-2-97	Ⅴ	頁 岩	36.9	13.9	4.8	1.8	無柄凹蓋		16
11	石 鏃	8-1-38	Ⅴ	黒曜石	22.3	9.2	2.8	0.7	無柄凹蓋	両面に原石面を残す	12
12	石 鏃	8-2-14	Ⅴ	黒曜石	18.6	9.6	2.3	0.3	無柄凹蓋		2
13	石 鏃	9-2-12	Ⅴ	黒曜石	34.6	16.0	5.3	2.6	柳葉形		20
14	石 鏃	9-2-60	Ⅴ	珪質頁岩	41.6	11.7	3.7	1.8	柳葉形	先端わずかに欠損、反っている	11
15	石 鏃	9-2-79	Ⅴ	黒曜石	30.0	15.7	3.7	1.2	有柄凸蓋	反っている	10
16	石 鏃	10-0-59	Ⅴ	黒曜石	32.1	14.5	4.5	1.4	有柄凸蓋	一端欠損	32
17	石 鏃	10-1-78	Ⅴ	珪質頁岩	40.1	19.0	3.5	2.5	無柄凹蓋	先端・一端欠損	22
18	石 鏃	11-1-16	Ⅴ	黒曜石	11.4	7.4	7.7	0.1		先端部の残存	26
19	石 槍	3-2-25	Ⅴ	黒曜石	61.2	21.6	6.5	7.2	有柄凸蓋		29
20	石 槍	3-2-35	Ⅴ	黒曜石	77.3	24.3	7.6	9.4	有柄凸蓋		15
21	削・掻器	3-3-50	Ⅴ	珪質頁岩	39.0	56.5	7.5	15.4	狭長刮片	先端背面・基部両面加工	30
22	削・掻器	5-1-79	Ⅴ	黒曜石	87.5	31.0	7.2	20.2		先端・一端縁背面、一端縁両面加工	14
23	削・掻器	6-2-54	Ⅴ	珪質頁岩	24.0	34.8	12.3	9.1		先端部片、両面加工	7
24	削・掻器	8-3-01	Ⅴ	珪質頁岩	39.2	32.7	7.0	7.6	切り出し状	基部欠損、一端縁両面加工	13
25	削・掻器	11-3-30	Ⅴ	メノウ	75.1	41.9	12.8	28.6		先端背面、一端縁一部両面加工	25
26	R・F	0-2-74	I	珪質頁岩	21.4	38.9	7.4	4.2		一端縁背面加工	24
27	U・F	7-2-29	Ⅴ	珪質頁岩	27.4	28.9	6.0	3.8		先端刃こぼれ状	4
28	R・F	9-2-55	Ⅴ	メノウ	52.9	59.7	19.2	38.9		先端背面加工	1
29	R・F	10-1-85	Ⅴ	珪質頁岩	48.9	69.7	15.6	43.3		先端から一端縁背面加工	27
30	石 核	10-1-98	Ⅴ	黒曜石	33.4	24.0	19.0	5.8		欠けている	23
31	石 核	11-2-61	Ⅴ	黒曜石	14.2	39.8	22.5	11.3			31
32	石 斧	1-2-24	Ⅴ	泥 岩	57.4	22.9	12.8	23.6		刃部欠損、基部再生	25
33	石 斧	1-2-24	Ⅴ	泥 岩	47.7	32.6	12.4	27.7		刃部欠損、基部再生	26
34	石 斧	4-2-94	Ⅴ	片 岩	151.2	55.8	26.0	271.9		敲打刺維	24
一	石 斧	10-2-89	Ⅴ	泥 岩	10.4	9.2	2.8	0.3		背部片	17
35	ナリ石	7-1-49	Ⅴ	安山岩	170	79.0	61.5	820	断面三角形	未製品、敲打によりすり面作出	10
36	ナリ石	7-2-79	Ⅴ	安山岩	160	74.7	73.6	1350	断面三角形	使用痕跡著	3
37	ナリ石	9-2-42	Ⅴ	安山岩	84.6	60.6	50.4	291.9		一面使用	5
38	ナリ石	10-2-75	Ⅴ	安山岩	185	76.0	82.2	1040	断面三角形	使用痕跡著	22
39	ナリ石	11-1-45	Ⅴ	安山岩	88.6	63.8	92.9	765	断面四角形	一端縁に敲打刺維、未製品か	31
40	たたき石	11-1-71	Ⅴ	安山岩	54.6	58.4	35.5	170.0		一端に敲打痕	27
41	砥 石	5-3-89	Ⅴ	砂 岩	160.0	117.3	46.0	980		一面に磨痕	29
42	砥 石	4-3-21	Ⅴ	砂 岩?	61.7	23.5	18.8	19.7		一面に半円形の溝	30
43	石 皿	3-3-81	Ⅴ	安山岩	198	182	85.3	4844		一面すりくぼみ、表面が粗い	23
44	石 皿	4-1-09	Ⅴ	安山岩	153.0	136.6	33.6	1118		一面すりくぼみ、一面みがき	28
一	石 皿	5-2-26	Ⅴ	安山岩	163	189	144.0	7850		一面すりくぼみ	14
一	台 石	8-3-21	Ⅴ	安山岩	310	170	80.0	3500		一面みがき	2
一	台 石	10-2-07	Ⅴ	安山岩	250	240	80.0	5500		一面みがき	4
45	台 石	10-2-50	Ⅴ	安山岩	391	186	81.2	7400		一面みがき	16
46	台 石	10-2-74	Ⅴ	安山岩	350	348	107.2	26900		一面みがき	21

II 遺構と遺物

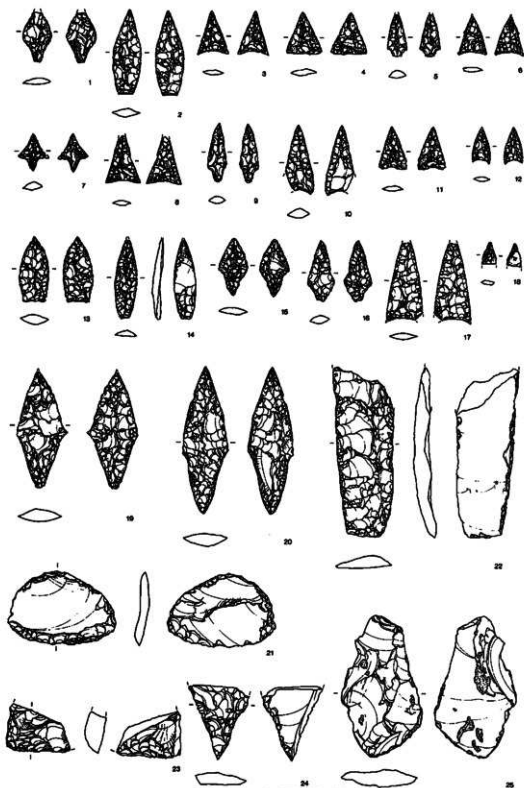


図23 出土石器 (1)

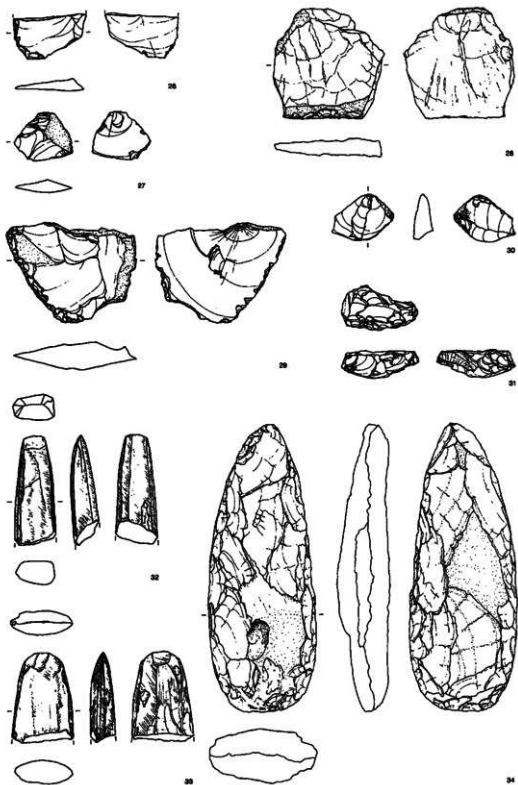


図24 出土石器 (2)

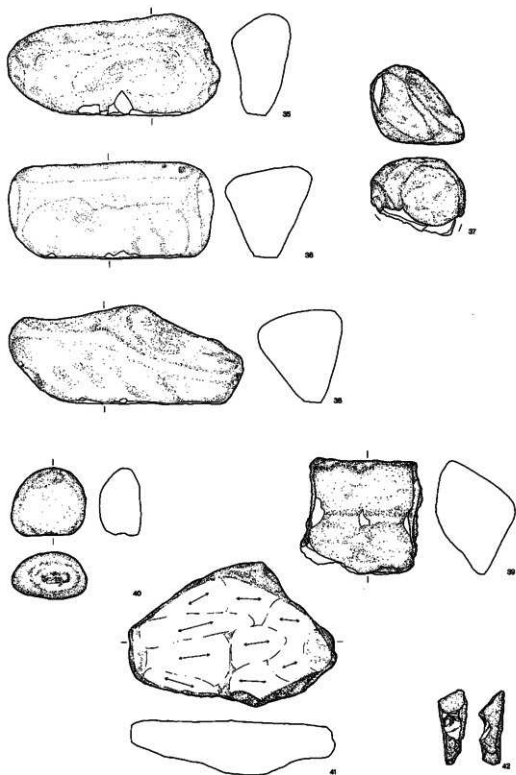


図25 出土石器 (3)

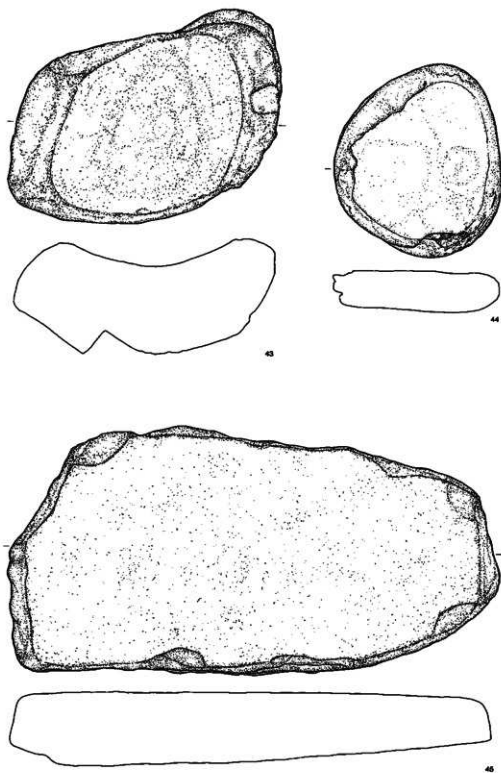


図26 出土石器(4)

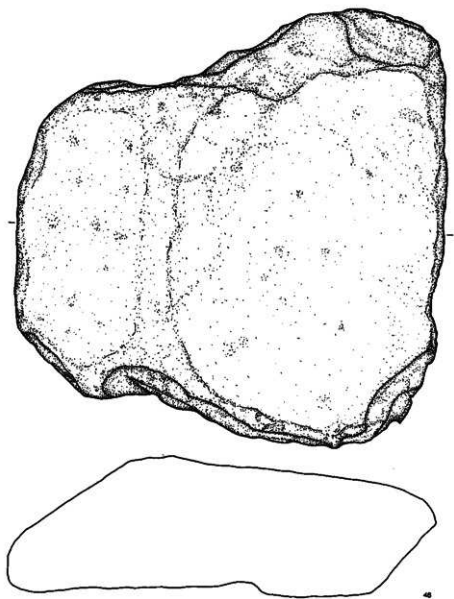


図27 出土石器 (5)

3 炭 窯 (図 28・29)

発掘区の最も北側にあたる丘陵の裾部分に直径 10 m ほどの大きなくぼみがあり、事前発掘調査段階での聞き取りによって、太平洋戦争末期に営まれた炭窯であることが確認されていた (図 29 参照)。

本調査にあたって、人力による表土除去を考えたが、急斜面で笹が密生しており、また大型の礫が点在して危険なため、重機による排土を実施せざるを得なかった。そのため、表土中に営まれたと考えられる窯口付近の諸施設、斜面を流れ落ちる雨水避けのための溝、炭を運び出す道などについては、検証することができなかった。

炭窯は、南向きの急斜面に立地するため、その構築にあたり平坦面を造成する整地作業が行われている。その範囲は、炊き口のやや上部から煙道の後方にかけての $9\text{ m} \times 8\text{ m}$ ほどである。整地部分の山側は、高さ 3 m ほどの急な切り面となっていて、斜面からの崩落が直接窯にかからないよう配慮されている。なお、この部分の排土は、平坦面を造出するため前面に押し出され、一部は窯の上部構造を築く際に利用されたと考えられる。

炭窯本体の掘り込みは、羽子板状を呈し、掘り込み面での長軸 6.5 m、短軸 4.5 m、窯底面で $4.6\text{ m} \times 3.4\text{ m}$ である。掘り込みの深さは、山側の壁で 1 m ほどである。地山に大きな石があり掘り出せない箇所があるため、若干平面形がゆがんでいる。

窯の奥側半分ほどに石組の壁が設けられている。煙道は最も奥にあり、いったん掘り抜いた後、石組を行いながら埋め戻して構築している。これらの石組は、周辺の地山に含まれる石 (安山岩) を利用し、できるだけ平坦な面を内側に向けるようにして、粘土で充填しながら積み上げている。炭化室と煙道部との境にあたる排煙口の上石 (掛石) には、特に直方体に整形した凝灰岩を使用している。また、石組の一部に、地山の石をそのまま利用した例がある。

窯口部には、灰のつまった浅いビットがある。窯の奥に石組があるので、窯口にも石を使用したと思われ、略測図に示めた窯口付近の石がそれにあたる可能性が高い。

窯底はほぼ平坦で、排煙口付近がやや低くなっている。窯口付近と排煙口付近がよく焼けており、窯口付近では灰が残っていた。窯底の上面には粉炭が一面にみられ、窯の天井部と思われる小礫の混じる焼けた粘土がその上にかぶっている。窯底部が小礫の混じる地山を利用しているので、通水性が高いためか、排水施設はみあたらない。

窯底の周辺と窯口付近で、直径 5～10 cm ほどの柱穴が数本検出された。壁の内側には、焼けてボロボロになった粘土が一部残存しており、その表面に板の跡が残っている部分がある。周辺の柱穴に立てた木柱を支えにして、板をあて窯壁が構築されたものと考えられる。また、窯口の柱穴は、焚口の施設を支えるためのものであろう。

窯本体の周辺部に、直径 15 cm ほどの大型の柱穴が検出されている。窯全体を覆う小屋掛がなされていたのであろうが、柱穴全体の配置がわからないため、構造を知ることはできない。

略測図によれば、窯口の下側斜面に段状の部分がみられる。炭材の詰め込みや焼けた炭の運び出しなどの作業をする施設で、斜面から検出されたいくつかの穴は、それに付属すると思わ

れる。また、溝状の構造は、斜面を流れる雨水の排水溝と考えられよう。

炭窯とその周辺からは、表土を除去したこともあって、関係する遺物は検出できなかった。

炭窯の構築にあたっては、できるだけ風にあたらないか、風が焚口から煙道に向かってあたるように設計するといわれている。この窯は、南向きに築かれており、海から吹くゆるやかな南の風を焚口から受け、山側が吹くときは、風があたりにくい場所に位置するよう配慮されている。

この窯は、石積みはあるものの黒炭製造用と思われ、北海道窯として紹介されている例によく似ている(注)。それによれば、窯の形態と構築方法は次のようであった。窯型はほぼ卵形で、炭化室最大幅は奥行き約7割、窯壁高さ2尺4寸から4尺である。窯壁は内面に杭を立て小柴を結び割板を並べ、内側に炭材を詰めした後で外側に土を盛、棒で突き固めた。窯口の下幅は、1.6尺～2尺、上幅はやや狭くし、高さは2～3尺、奥行き1～2尺の点火室を設けた。煙道構築は、石と粘土を用いるか、箱を作りその周りを粘土で固めて後焼いた。煙道は、10分の3後方に傾斜し、窯壁以上は垂直にした。天井構築は、木口置き法により、厚さは周囲7～10寸、頂は2～3寸の仕上げとした。

注 三浦伊八郎 昭和8年『炭窯百態』による。

※聞き取りから

「谷藤川流域における炭焼きについて」

炭焼きは、明治初年の伊達藩入植後から行われているが、生活に必要な炭を焼く程度であった。それが、太平洋戦争中から戦後にかけては、各地で炭が焼かれていた。

谷藤川周辺では、太平洋戦争中に渡辺氏という炭焼き職人が来て、小野氏の土地を借りて炭焼きを行った。炭窯は2カ所あり、交互に炭を焼いた。1ヶ所は今回発掘した地点で、もう1ヶ所は少し上の横山氏の土地との境にあった。

炭材は、丘陵地帯にある町有林の払下げを受け、それを利用した。谷藤川流域で炭焼きをしていた職人はほかにもおり、その頃は山が丸坊主であった。現在ある木は、その後生えたものである。

よく窯から煙が出ていたのは覚えているが、細かいことまではみなかった。焼き上げた炭の運び出しのために、掘り上げ土を前面に出して道を付けていたようだ。

職人は、遺跡のすぐ下にあるやや低い土地に仮小屋を建てて住んでいた。その息子が紋別東小学校に通っており、昭和19年の卒業生名簿に名前が載っている。戦後すぐにほかの土地へ移っていったので、炭焼きが行われたのは昭和18年頃から20年にかけてであろう。

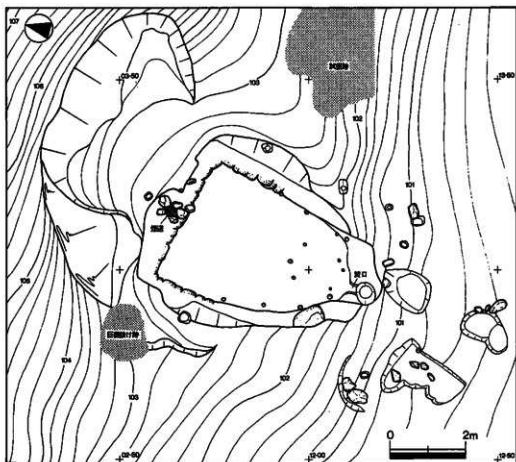


図28 炭窯平面

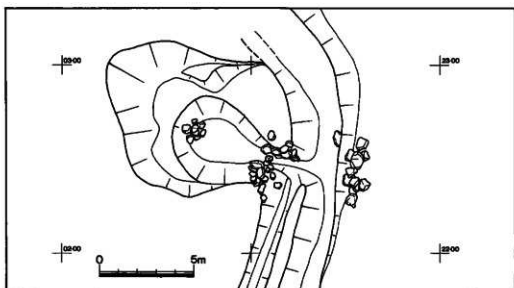


図29 炭窯略測 (試掘調査時のもの)

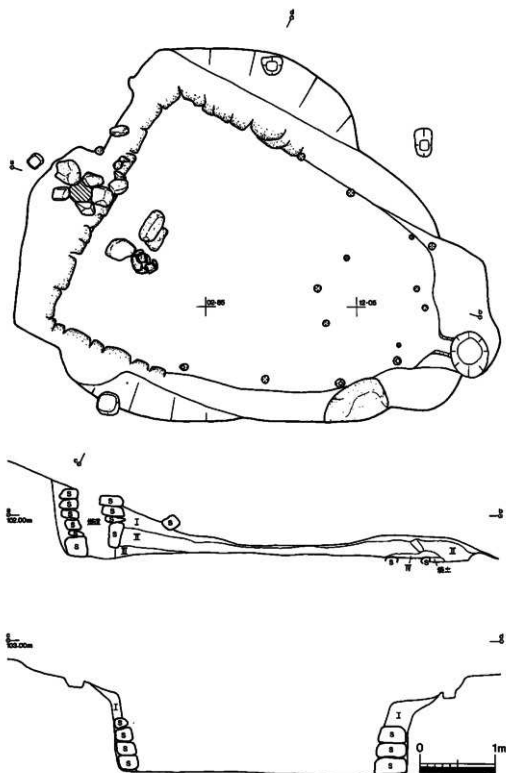


図 30 炭窯平面及び断面

伊達の開拓と用水路の開削

伊達市郷土資料室 松下昌靖

数年前のことである、あやめ川と呼ばれる小川の草むらから、大小の石くれに混じって一基の碑石が見付かり、町的话题を賑わしたことがあった。それは、やや小ぶりの石に刻まれた水神の碑だったが、石の側・裏面には、亙理伊達藩新地邑居住の家臣達が、北海道移住に至った順末と、その後に味わった労苦のさまざまを記し、さらに飲料水を得るために、水路を掘ってこの水神碑を立てたのだという事が、漢文を以てびっしりと刻み込まれていた。

紋鑑の開拓拠点の西端を区切るのは、館山台地に沿って流れる気門別川で、東端は、ここから室蘭方向へ四キロも歩いたところ、内浦の海へほぼ直角に貫流しているイマリマレップ川(谷藤川)である。この両河川によって区切られた約四キロ四方の平野部は、その後一級の農耕地が開け、また市街地が形成されて、現在の伊達市の中心部をなしていくのだが、入植の当初は、困ったことに住居を構えるに適した川流の場所が少なかったのである。もちろん雪解けのころ浅い山ひだから流れ出る流溝や、大雨の後の氾濫水のはけ跡などは太古のままに残されていて、当時作られた略図面にもそれは記されている。

井戸は10尺(約3メートル)から15尺(約4.5メートル)も掘れば、たいてい水は出たはずである。しかし、食料の備えもなく渡航した移住者達は、一日も早く木を切り、熊笹を刈り払い、畑を作らねばならない。そして蒔きつけを終えなければ秋の収穫は望めない。当面の糧となる菜っ葉や大根も必要だ。家も建てねばならない。苦しくとも順序良く体を動かし続けなければ、早晚餓死は目に見えたことなのである。しかし水の問題は重要だった。誰もが始めは多少の不自由を忍んでもと、朝夕かなりの道のりを、身の丈ほどの熊笹をかきわけながらの水運びを日課としていたが、人々にとってこれは思いの外の苦闘だった。土地の良否など営農の条件よりも、手近に水がある場所を求めて、この地を立ち退くものが現われ出したのである。

入植初期の開拓者達が、用水路を掘って日常の生活用水とし、また食料穀物の精搗・製粉の動力源としても利便を得ていたことは、父祖の口伝えにより知られてはいたが、その具体的な記録等は発見されていなかった。ところが「あやめ川」の林中でみつかった水神碑の碑文に引き続き、このたびは当市出身で、いま札幌市にご在住の伊藤繁氏が、北海道立文書館の膨大な資料の中から、谷藤川支溝開削についての報告書を発見され、その詳細な全容が明らかとなった。同氏のご好意によりお許しを得たので、以下この報告書を若干の私見を加えながら現代語訳してお知らせする。

「有珠郡紋鑑村移民共自費新溝掘割之義上申書」という文書が、明治7年6月の日付で室蘭出動・九等出仕・細川 碧から、大判官 松本十郎と六等出仕 時任為基に宛てて送られている。

ついでなので開拓使初期の官事情をみると、まず明治4年8月に旧藩制を模した「支配」制

度が廃止され、伊達邦成は今でいえば国家公務員（官員）となり、有珠郡開拓使出張所の主任官とされていた。室蘭と幌別にも同様の役所が置かれていたが、札幌など奥地の開発が進むにつれ、とくに港をひかえた室蘭出張所には、本庁から差し回しの官員が配置されていて、有珠・虻田・幌別などの業務を統括していたようである。室蘭結めの細川碧は、大判官で元庄内藩士松本十郎の同郷人であろう。

札幌に開拓使本庁が置かれたのは明治5年9月、庁舎の落成は明治6年11月のことで、明治2年からそれまでの業務は、函館・小樽などに臨時の庁舎を設けて処理されていた。

東久世長官、黒田次官らは東京本庁（札幌へ本庁移転後は東京出張所）にいて、諸般の政務にあたっていた。東久世長官は公家だから、実権は黒田次官が握っていて、現地北海道では松本十郎が、前任者の岩村通俊にかわって大判官となり、黒田次官の手足となって働いていた。

話がさらに横道にそれて申し訳ないが、松本十郎という人物について触れてみる。彼は、庄内藩（山形・鶴岡市）祖頭 戸田文之助の長男として生まれ、父にしたがって蝦夷地警備につき、苫前・浜益に勤務したこともあった。戊辰戦争の際は、庄内藩は奥羽列藩同盟に加わり、十郎も黒田参謀の率いる官軍と戦った。敗戦ののち彼は松本十郎と変名して京都に潜入し、庄内・酒井藩の赦免・存続に奔走、その間、新政府要人、特に黒田清隆に認められ、黒田の開拓使入りと共に起用された人で、大判官は勅任官三等、軍の位では少将相当、次官に次ぐ顯職であり、開拓使現地の最高責任者であった。

上申書の大要は、私（細川）がこのたび室蘭に赴任して管内を巡視したところ、紋甕村弄月で、移住民が協力して4本の用水路を掘り上げ、谷藤川から通水を行うという大工事が完成しているのを目撃した。これは開拓者達が他に頼ること無く、独自に達成した偉業であり、他の移民達への手本にもなることである。官としてもこのまま見過ごしには出来ない。時期を失してはいるが、なんとか表彰して広く知らせたいので、書類を添えて上申致します。

なお別紙には、工事に携わった全ての者の、氏名と延べ日数を記したが、この事業を主導した、兵頭職蔵以下11名は更に特別の褒賞を行なわれるよう、その名簿も付して上申致します。

ざっと以上の趣旨が記された文書である。別紙として付された書類には「有珠郡紋甕村御扶助民兵頭職蔵其外ノ者共自カ力以テ今礼稱府川ヨリ紋甕村弄月町ニ堰上新堀相通候事談調」として、有珠郡出張所在勤 八等出仕（出仕は待遇の意）伊達邦成、同十三等出仕 田村順允の連名で、更に詳細な状況が報告されているので、以下にそれを要約する。

有珠郡紋甕村のうち弄月町の中ほどから上は、地面が高く井戸を掘っても水が出ない。ここから北の裏側に川跡があって、雪解けの頃は少しばかりの水が流れるのだが、夏になると枯れてしまうので、家によっては3町（327メートル）から5町（545メートル）もの間を歩いて水汲みしており、一方ならず難渋していて、開拓をあきらめる者や屋敷數えを申し出るものも現われるようになった。

弄月入植者の中に、兵頭謙蔵(当時 47 歳)というものがあって、この有様を憂慮し、上手を流れるイマリマレップ川から掘を通せば通水が可能であると考え、同じ悩みを持つ近隣 26 戸の人達に働きかけて、明治 5 年 6 月 5 日から水路の掘削に取り掛かったのである。ところが仕事をはじめてみると、取水口となる河原とその一帯は、大石が果々と層を成し、道具の持ち合わせとてない移住者 27 人が、いかに力をふりしぼっても、仕事は遅々として捗らず、一人また一人と顔を見せない者が増えるようになったが、兵頭謙蔵はひるむところなく営々として努力をつづけていた。兵頭ら上弄月の者達の工事がもし成功すれば、水路下流の移住者達も当然、その恩恵は被ることである。兵頭ら 27 戸より下手に常盤大八郎(43 歳)というものがおり、彼が住む地区の 25 戸と相談して協力を申し出てきた。そして 7 月 17 日になると、その更に下手の地区の者や、受益地外の住民まで多数が手伝ってくれたので 7 月 19 日ついに幹線水路を掘り上げ、美事通水に成功したのである。

この工事には、おおよそ 2 千余名の人手が必要なものと思われたものだが、前述の様な兵頭謙蔵の、一大発心と不退転の行状が感動を呼び、全村延べ 1,128 人もの人々が無報酬で出役して完工に至ったのだが、兵頭に協力して工事完遂に功勞のあった者は下記のとおりである。

兵頭 謙蔵 主となって業をはじめたもの

小泉 甚右衛門、常盤 大八郎 兵頭につき奮起した

渋谷 嘉内 65 歳 7 ヶ月余の老衰の身を以て率先鼓舞不撓のもの

小野 幸作、黒川 慶蔵 測量のことを担当した

伊庭野 蔵之丞、武者 亮作、草野 忠四郎、遊佐 忠太夫、矢戸 佐平太、大堀 直之進
終始主となって有力だったもの

この幹線水路が通水したので、翌明治 6 年夏には、弄月町の中程から巽小路を経て教育所(後の木田地)までの 600 間(1,092 メートル)余に枝堀を通した。この工事には兵頭謙蔵、常盤大八郎を始め 51 戸、106 人が出役した。また同年 7 月には、清野志馬ら 8 戸、延べ 50 人が出て萩原町西側の水路 600 間余、そして同じ頃、武田忠四郎ら 12 戸 90 人で弄月町南側へ 600 間余、笠原弥一郎ら 32 戸 32 人で清住町の 100 間余と、以上 4 本の枝堀が作られ通水した。兵頭謙蔵、常盤大八郎ら 51 戸、64 人は、それぞれの水路下流の泥さらいをも行って全工事を完成させた。

4 本の水路開削により、日常の生活用水に苦しんでいた 100 余戸はもとよりのこと、新開の耕地は潤いを増すなど、その恩沢は計り知れないものである。

堀の大小、深淺、長短その他は、繪図面にして添付します(図 31)。

明治 7 年 6 月

兵頭らが最後に行った泥さらいのことだが、彼等が掘上げた 4 本の水路の内、萩原水路を除く 3 本は、現在の伊達中学校付近から開拓記念館のあたりまでの湿地帯か、小川跡などに放流

したものようで、この時の泥さらいは、海までの端末部分の水草をけずるなどして、簡単な導水路を作ったものだろう。

室蘭勤務の細川碧からの報告を受けた札幌本庁では、早速東京の長官に当てて上申の手続きが取られたようだが、この時期、黒田清隆の開拓使長官就任など、中央・地方を通じての大異動があり、その故もあってか、紋鑑村民賞督の件は意外に長引いた。明治8年3月17日付東京宛文書からみて、それまでの内規により、見積り総金額の10分の1を褒章しようとする松本大判官の賞督案も、旧規であるとして、実現には至らなかったらしく、関係者全員には賞状と、兵頭ら11人へのみ木杯が下賜されたようである。

谷藤川からの主幹水路と3本の枝溝水路は、いずれも住宅地を貫流するように作られたので、人々は朝夕の水運びから解放され、開墾に専念出来るようになったし、やがて栗・稗・蕎麦などが収獲されるようになると、戸毎に“ばったり”が作られ、精搗・精白を行っていた。水路をまたいだ草葺き小屋からは、ひねもす鈍い杵音と水音がこだましていたものである。

“ばったり”は、太い丸太の一端をスプーン状に削り、シーソー式に取り付けた水力臼とでもいべき簡単な施設である。たくさんの水量や大きい落差も必要としないので、このような小用水では、打って付けの動力源として重宝されたのだった。

後続移住者への、住宅と開墾地割り渡しも容易となり、水路沿いに入植した開拓者は、一般に安定して開墾に打ち込めたらしく、当初から定着永住する旧家が他に比べて多いのは、兵頭謙蔵や常盤大八郎らの働きによる、水路開削に負うところが多かったようにも思われる。

谷藤川の用水路取水口には、やはり水神碑が立てられている。今では、笠のように空を覆った大木の根方にひっそりと鎮まっていて「俺たちのぢいさん等が、水を通した記念に立てたんだそうだが」という口伝いが聞かれるのみで、詳しいいきさつなどは全く忘れ去られていたものである。

21世紀に向けて、北海道の発展を将来する高速自動車道は、この水神碑のやや上手で谷藤川を横断するが、着工に先立って関係部分の考古学的調査にあたられた、(財)北海道埋蔵文化財センターのご厚意により、計らずもその調査報告書にスペースを頂戴し、祖父等の偉業を紹介する機会を与えられたことは誠に光栄であり、まさに水路開削115年目の褒賞でもある。関わりを持つ多くの市民と共に深甚の謝意を表する次第である。



图31 疎水図面

(明治7年6月伊達邦成、田村顯允提出書類付図をもとに作成)

明治5年有珠郡紋龜村新水道掘方人夫功績区分表

第一等

力役延日数 四十日	岩 間 弥之助	他家族二人
力役延日数三十八日	松 下 大 助	他家族一人
力役延日数二十九日	阿 部 七左衛門	他家族一人
力役延日数二十八日	武 者 亮 作	他家族一人
力役延日数二十八日	尖 戸 左平太	他家族一人
力役延日数二十八日	伊 藤 郷七郎	他家族一人
力役延日数二十八日	高 野 徳 衛	他家族一人
力役延日数二十八日	渡 辺 左 吉	他家族一人
力役延日数二十八日	横 山 寛 藏	他家族一人
力役延日数二十三日	兵 頭 謙 蔵	他家族一人

合延日数 二百九十八日

第二等

力役延日数十七日	小 泉 甚右衛門	小 野 幸 作		
力役延日数十五日	草 野 忠四郎	遊 佐 忠太夫	大 堀 直之道	渋谷 嘉 内
伏 田 留之進	兵 頭 貞 蔵	丹 野 文 六	大 富 田 順 蔵	山 木 平三郎
斎 藤 哲三郎	大 宮 文之丞	今 野 竹 治	覆 笠 三郎	鈴 木 清 蔵
木 村 貞 治	千 葉 武 内	佐 藤 義三郎	常 盤 大八郎	黒 川 慶 蔵
合延日数	三百一十一日			

第三等

力役延日数 八日	伊庭野 康之丞	伊 藤 英 語	小 野 貞吉郎	羽 田 右馬之助
力役延日数 五日	渡 部 仁左衛門	木 村 岱三郎		
力役延日数 四日	渡 部 郷左衛門	難 波 左 伝	只 野 左金治	加 藤 要之進
三戸部 斎 太	佐 伯 勇太郎	阿 部 十左衛門	永 谷 八十治	村 木 孝 英
笠 原 弥一郎	笠 原 府 治	宇佐美 力之助	荒 井 由 尾	伊 藤 作之丞
金 沢 春 治	成 田 長左衛門			
力役延日数 三日	國 島 和太夫	大和田三郎兵衛	庄 司 秀 雄	小 島 幹二郎
中 沢 八 郎	難 波 玄 泰	阿 部 周 助	遠 藤 左太夫	白 土 小一郎
星 敬 治	浜 田 茂十郎	前 田 右 膳	鹿 野 源 助	杉 浦 勝 助
板 橋 左 覚				
力役延日数 二日	大 槻 頼左衛門	小 島 清三郎	鈴 木 小平治	押 野 盈
加 藤 左 内	及 川 林 助	渋谷 亀 吉	大 槻 民 治	小 島 周 蔵
甲 田 市三郎	小 林 善 助	島 貫 慶 治	大 吉 野 易 蔵	三 浦 屯
鈴 木 孫左衛門	鈴 木 謙 吉	加 藤 勇 悟	清 野 岱 助	半 沢 俊 蔵
斎 藤 貞 吉	佐 藤 玉 蔵	太 田 勝 吉	高 橋 常之丞	水戸部 万 治
鈴 木 留之助	南 条 篤三郎	高 野 良三郎	高 野 新 平	唯 木 猛三郎
白 石 幸右衛門	佐 藤 直右衛門	横 山 庄左衛門	高 橋 彦 市	志 茂 八十郎
鈴 木 孫 惣	脇 田 康之進	但 木 市郎平	萱 場 甚三郎	黒 田 念次郎
高 橋 司 馬	小 川 助四郎	荒 川 又左衛門	石 井 軍右衛門	沢 井 四 郎
手代木 嘉 蔵	三 品 万之助	蔵 田 忠 平	佐 々 俊 雄	余 目 伝 吉
伊 藤 小三郎	大河原 栄次郎	石 田 一 馬	荒 總 治	佐 藤 治右衛門
杉 浦 藏之丞	黒 田 文吉郎	佐 藤 助三郎	大 橋 虎吉郎	小 野 権太夫
大和田 綱	高 橋 市 郎	氏 家 軍太夫	荒 川 亀 治	真 壁 鉄之助
佐 藤 久 松	佐 藤 関 衛	中 川 岩 松	牧 野 民三郎	目 黒 斎 庭
荒 雄 作	斎 藤 幸之進	羽 田 雄四郎	林 重 平	斎 藤 惣左衛門

遊佐金次郎	鈴木友藏	鈴木勇八	鈴木大吉	舟追新三郎	小高野久三郎
大久野五右衛門	鈴木友藏	村山純一郎	熊大九左衛門	加藤孫四郎	貫野厚治
鈴木友藏	鈴木友藏	二階堂勘左衛門	横山新五右衛門	源藏	源亦吉
市川内常三郎	鈴木友藏	猪狩直之進	渡部善藏	加茂清九郎	伊藤猛之進
森内万六	鈴木友藏	小野市三郎	渋谷松藏	北沢清之進	小坂重平
鈴木由藏	鈴木友藏	高野重郎	鈴木清四郎	菅野要右衛門	清野岳仙
小田島孫六	鈴木友藏	佐藤源四郎	穴戸泰庵	清野貞助	斎藤本格
大和田左武郎	鈴木友藏	山木忠三郎	斎藤多右衛門	加藤仁三郎	鈴木源三郎
龍之進	鈴木友藏	百井榮之進	国島秀三郎	砂金源十郎	鈴木源右衛門
鷺崎勇之助	鈴木友藏	守谷伊左衛門	丹野千代三郎	太田德太郎	手代木順藏
大塚文治	鈴木友藏	羽田昌之助	赤間惣七郎	只野理喜治	志茂利助
佐藤作右衛門	鈴木友藏	千葉仲右衛門	安瀬平三郎	大堀貞和	遊佐亮悟
成毛直吉	鈴木友藏	太田小三郎	大内民藏	寺島九平	斎藤達助
大友義平	鈴木友藏	杉目榮吉	田村頭允	新妻忠悟	但木京助
金子雄三郎	鈴木友藏	大田文之丞	市川雄吉	荒沢与市	伊藤野忠
横山健治	鈴木友藏	太田庄四郎	佐藤鶴吉	中島英記	伊藤藤友
猪苧利三郎	鈴木友藏	伊藤龜遊	岡本直人	黒田左衛門	斎藤藤周三郎
横山權左衛門	鈴木友藏	岩崎清馬	荒井龍藏	今野定之進	阿部門之進
荒井伍八郎	鈴木友藏	佐藤長松	平甚次郎	桑島平太夫	清野民三郎
佐藤安平	鈴木友藏	木村看松	猪股武右衛門		舟口喜藏
加藤順作	鈴木友藏	金沢保之進	広瀬大七		

合延日数

五百十九日

合計延日数 千百二十八日

明治六年有珠郡紋龜村枝堀堀方並新堀下流泥濘功績区分表

力役延日數 八日	武 田 忠四郎	斎 藤 新八郎	江 黒 常 吉
永 田 潜 藏	星 清次右衛門	菊 地 健 助	星 嘉右衛門
力役延日數 七日	片 平 久 馬	高 山 今朝吉	小 野 平 治
日 下 多 藏	大 内 孫四郎	清 野 志 馬	中 野 喜 七
力役延日數 六日	安 住 晋	佐 藤 直 衛	坂 本 令 宣
佐 藤 竹 治	鈴 木 亀 太	百 井 三 郎	岩 間 弥之助
外=家族二人	松 下 大 助	外=家族二人	
力役延日數 五日	兵 頭 離 藏	兵 頭 貞 藏	山 本 平三郎
常 盤 大八郎			
力役延日數 四日	阿 部 七左衛門	外=家族一人	草 野 忠四郎
伏 田 留之進	小 野 幸 作	小 泉 甚右衛門	斎 藤 哲三郎
遊 佐 忠太夫	伊 藤 鄭七郎	外=家族一人	穴 戸 佐平太
外=家族一人	武 者 弘 人	外=家族一人	横 山 寛 藏
外=家族一人	木 村 岱三郎	荒 井 由 尾	黒 川 慶 藏
伊 藤 作之丞	成 田 長左衛門	小 野 貞吉郎	渡 部 郷左衛門
渡 部 仁右衛門	加 藤 要之進	三戸部 斎 太	佐 伯 勇太郎
阿 部 十左衛門	永 谷 八十治	村 木 孝 英	羽 田 右馬之助
伊庭野 蔵之丞	笠 原 弥一郎	笠 原 庸 治	
力役延日數 三日	渡 辺 善三郎	大 堀 直之進	復 惣三郎
鈴 木 華 花	渡 谷 嘉 内	木 村 貞 治	千 葉 武 内
佐 藤 義三郎	伊 藤 栄 悟	宇佐美 力之助	離 波 左 伝
只 野 左金吾	斎 藤 義 道	小 貫 只之丞	
力役延日數 二日	丹 野 文 六	富 田 順 藏	大 宮 文之丞
渡 部 佐 吉	今 野 竹 治	金 沢 春 治	
合延日數 三百四十二日			

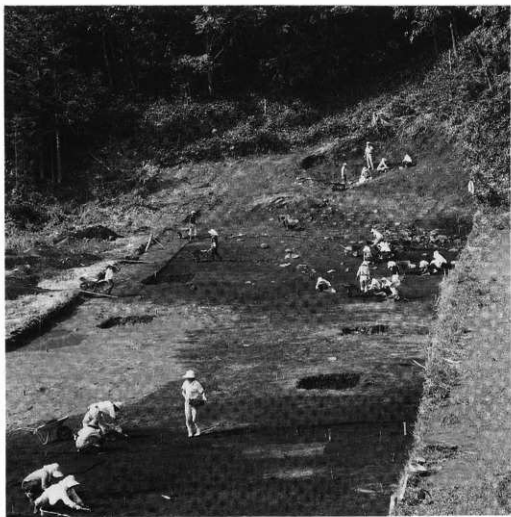
谷藤川右岸遺跡
写真図版



遺跡遠景（海岸方向から）



沢部分の調査



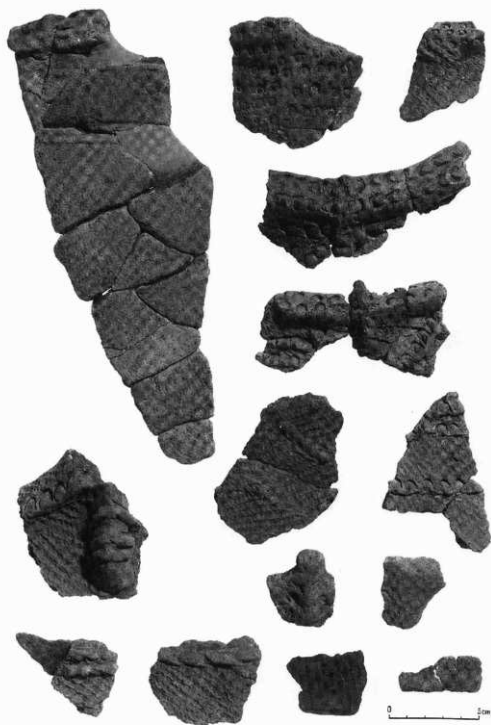
発掘調査状況



土器の出土状況と復元個体



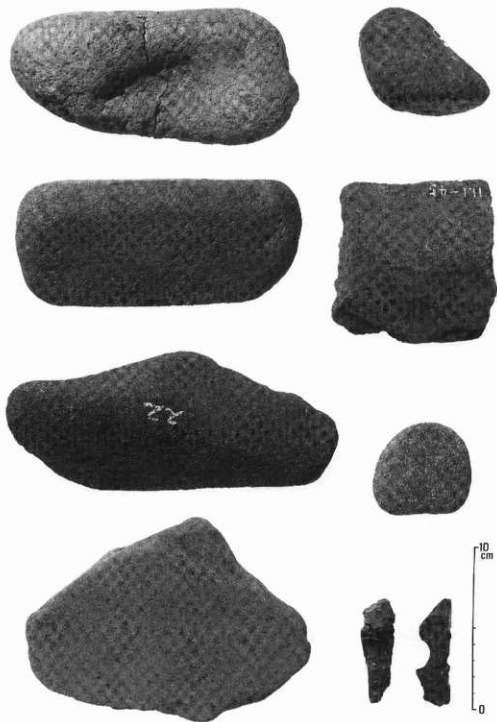
包含層出土の土器 (1)



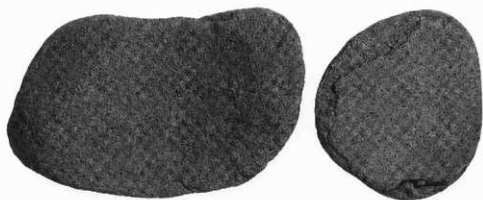
包含層出土の土器 (2)



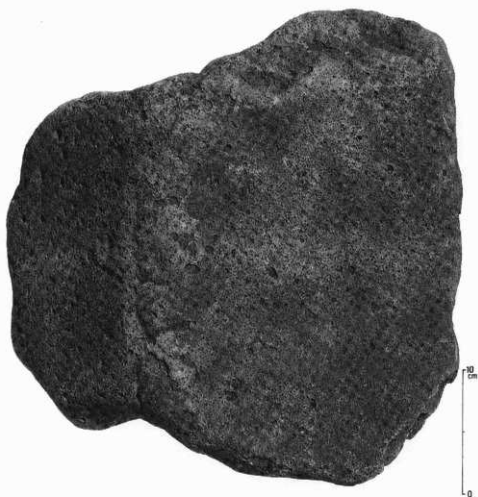
包含層出土の石器 (1)



包含層出土の石器 (2)



包含層出土の石器 (3)



包含層出土の石器 (4)



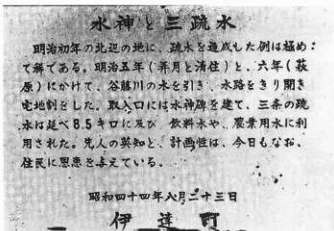
炭窯調査状況 (1)



炭窯調査状況 (2)



煙道部



水神の碑 説明文



今に残る疎水跡 (1)



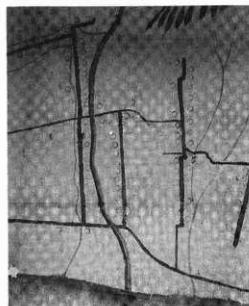
水神の碑



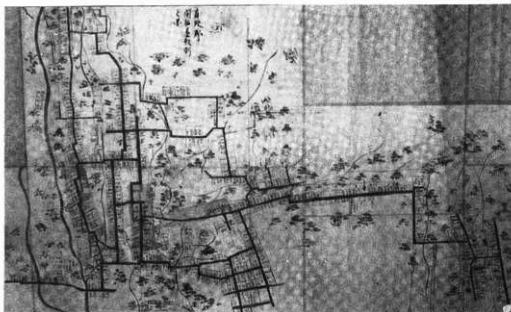
今に残る疎水跡 (2)



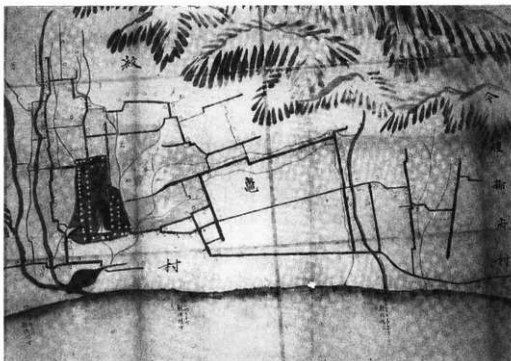
写真図版 11-1 の右下部分拡大図



写真図版 11-2 の右側部分拡大図



1 有珠郡開拓厘敷割之圖（明治5年頃伊達邦成筆の写し）伊達市開拓記念館蔵



2 有珠郡概圖（明治20年頃）伊達市開拓記念館蔵

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第64集

伊達市 谷藤川右岸遺跡

—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成2年3月31日 発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
TEL (011) 561-3131

印刷 興国印刷株式会社
063 札幌市西区西町南13丁目1-40
TEL (011) 661-2221(代)

この報告書は、日本道路公団札幌建設局のご了解を得て増刷したものです。

